

賢さか

木き

(二四九) 九月二十五日

御息所伊勢下向決定・源氏の秋風淋しき野宮訪問・別離の悲愁——齋宮
 母子の参内・出發——桐壺院重き御惱・崩御——藤壺三條宮に移居——
 右大臣一門の隆盛——朧月夜に逢ふ源氏——源氏雲林院参籠——源氏天
 機及び中宮の機嫌奉伺——故院の御國忌・藤壺の法華八講・藤壺落飾——
 昨日に變る藤壺・源氏・左大臣方の失意——病氣里居の朧月夜と源氏の
 逢瀬・右大臣に見顯された雨の朝・太后（弘徽殿）の怒り



齋宮の御下り近うなり行くまゝに、御息所物心細く思ほす。やんごとなく煩は
 しき物に覺え給へりし、大殿の君も亡せ給ひて後、さりととも世の人も聞え扱
 ひ、宮の内にも心ときめきせしを、その後しも搔絶え、淺ましき御もてなしを
 見給ふに、眞に憂しと思す事こそありけめと、知り果て給ひぬれば、萬づの哀
 れを思し捨てて、直路に出で立ち給ふ。親添ひて下り給ふ例も殊に無けれど、

いと見放ち難き御有様なるに事託けて、憂き世を行き離れなむと思すに、大將の君、流石に、今はと掛け離
 れ給ひなむも口惜しう思されて、御消息ばかりは、哀れなるさまにて度々通ふ。對面し給はむ事をば、今更
 に有るまじき事と、女君も思す。人は心づき無しと思ひ置き給ふ事もあらむに、我は今少し思ひ亂るゝ事の
 増るべきを、あいなしと心強く思すなるべし。

舊の殿には假初に、渡り給ふ折々あれど、いたう忍び給へば、大將殿はえ知り給はず。容易く御心に任せ
 て、参うで給ふべき御住處に將たあらねば、覺束なくて月日も隔たりぬるに、院の上、おどろ／＼しき御惱
 みにはあらで、例ならず時々惱ませ給へば、いと御心の暇なけれど、辛きものに思ひ果て給ひなむもいと
 ほしく、人聞き情なくやと思し起して、野宮に参うで給ふ。九月七日ばかりなれば、無下に今日明日と思す
 に、女方も心慌しけれど、立ちながらと、度々御消息ありければ、いでやとは思し煩ひながら、いと餘り

(一) 源が御息所を正
 妻にされるだらう
 といふ噂

(二) 御息所方
 (三) 源は

(四) 對面したら自分
 はもつと

(五) 御息所が六條京
 極の舊邸へは

(六) 今の野宮は
 (七) 桐壺院

埋れいたきを、物越ばかりの對面はと、人知れず待ち聞え給ひけり。

遙けき野邊を分け入り給ふより、いと物哀れなり。秋の花皆衰へつゝ、淺茅が原も枯れ／＼なる蟲の音に、松風凄く吹き合はせて、その事とも聞き分かれぬ程に、物の音ども絶え／＼聞えたる、いと艶なり。睦まじき御前十餘人ばかり、御隨身事々しき姿ならで、いたう忍び給へれど、殊に引繕ひ給へる御装ひ、いとめでたく見え給へば、御供なる好き者ども、所がらさへ身に泌みて思へり。御心にも、なごて今まで立ち慣らさざりつらむと、過ぎぬる方悔しう思さる。物果敢なげなる小柴垣を大垣にて、板屋ども、邊々いと假初なめり。黒木の鳥居どもは、流石に神々しく見え渡されて、煩はしき氣色なるに、神司の者ども、此處彼處に打咳きて、己がどち物打言ひたるけはひなども、外には様變りて見ゆ。火燒屋幽に光りて、人氣少くしめ／＼として、此處に、物思はしき人の、月日を隔て給へらむ程を思しやるに、いとみじう哀れに心苦し。北の對の、さるべき所に立ち隠れ給ひて、御消息聞え給ふに、遊びは皆止めて、心憎きはひ數多聞ゆ。何くれの人傳の御消息ばかりにて、自らは對面し給ふべきさまにもあらねば、いとものしと思して、眞斯様の歩行も、今はつきなき程になりて侍るを思し知らば、斯う注連の外にはもてなし給はで、いぶせう侍る事をも明らめ侍りにしがな」と、眞實に聞え給へば、人々、女房連「實にいと傍痛う、立ち煩はせ給ふに、いとほしう」など扱ひ聞ゆれば、いさや此處の人目も見苦しう、かの思さむ事も若々しう、出で居むが今更に慎ましき事と思すに、いと物憂けれど、情なうもてなさむにも猛からねば、とかう打敷きやすらひて、膝行り出で給へる御けはひ、いと心にくし。眞此方は、簀子ばかりの許されは侍るや」とて、上り居給へり。花やか

(一) 辭屈してゐるから (二) 外圍 (三) 衛士が庭燎を焚いて守る小舎 (四) 不似合な (五) 源の (六) 神事の宮ではあるが

に差出でたる夕月夜に、打振舞ひ給へる様、匂ひ似る物無くめでたし。月頃の積りを、つき／＼しう聞え給はむも、眩き程になりければ、神を聊か折りに持給へりけるを、差入れて、眞變らぬ色をしるべにてこそ、齋垣をも越え侍りにけれ。さも心憂く」と聞え給へば、

御息所 神垣は標の杉も無きものを如何に紛へて折れる神ぞ

と聞え給へば、

源 少女が邊と思へば榊葉の香をなつかしみ尋めてこそ折れ

大方のけはひ煩はしけれど、御簾ばかりは引著て、長押に押懸りて居給へり。心に任せて見奉りつべく、人も慕ひさまに思したりつる年月は、長閑なりつる御心驕りに、さしも思されざりき。又心の中に、如何にぞや、疵ありて思ひ聞え給ひにし後、將た哀れも冷めつゝ、斯く御中も隔たりぬるを、珍らしき御對面の昔覺えたるに、哀れと思し亂るゝ事限りなし。來し方行く先思し續けられて、心弱く泣き給ひぬ。女は、さしも見えじと思し慎むれど、え忍び給はぬ御氣色を、いよ／＼心苦しう、なほ思し止まるべき様をぞ聞え給ふめる。月も入りぬるにや、哀れなる空を眺めつゝ、怨み聞え給ふに、許多思ひ集め給へる辛さも消えぬべし。やう／＼今はと思ひ離れ給へるに、さればよと、なか／＼心動きて思し亂る。殿上の若君達など打連れて、

(一) 千早振る神の齋垣も越えぬべし大宮人の見まくほし

山本戀しくば訪らひ來ませ杉立てる門(古今、雜下) 神樂の奏せられ

ば。少女は神樂に奉仕する少女。榊葉は御息所 榊葉の香をかぐは

十氏人ぞ團居せりける(拾遺、神樂歌) 源が思ふ儘に 伊勢下向を

(六) 源が (七) 源が (八) 御息所は

とかく立ち煩ふなる庭のたゝすまひも、實に艶なる方に、うけばりたる有様なり。思ほし残す事無き御中らひに、聞え交し給ふ事ども、まねびやらむ方なし。やう／＼明け行く空の氣色、殊更に作り出でたらむやうなり。

源 曉の別れはいつも露けきをこは世に知らぬ秋の空かな

出で難てに、御手を執らへてやすらひ給へる、いみじう懐かし。風いと冷やかに吹きて、松蟲の鳴き嘆したる聲も、折知り顔なるを、さして思ふ事なきだに、聞き過し難げなるに、ましてわりなき御心惑ひどもに、なかく事も行かぬにや。

息 大方の秋の別れも悲しきに鳴く音な添へそ野邊の松蟲

悔しき事多かれど甲斐無ければ、明け行く空もはしたなくて出で給ふ。道の程いと露けし。女もえ心強からず、名残哀れにて眺め給ふ。仄見奉り給へる月影の御容貌、なほ留まれる匂ひなど、若き人々は身に染めて、過ちもしつづくめで聞ゆ。女房達「如何ばかりの道にてか、斯かる御有様を見捨てては、別れ聞えむ」と、あ

いなく涙ぐみ合へり。
御文、常よりも細やかなるは、思し靡くばかりなれど、又打返し定めかね給ふべき事ならねば、いと甲斐無し。男は、さしも思さぬ事をだに、情の爲にはよく言ひ續け給ふべかめれば、ましておし並べての列には思ひ聞え給はざりし御中の、斯くて背き給ひなむとするを、口惜しうもいとほしうも思し惱むべし。旅の御装束より初め人々のまで、何くれの御調度など、殿しう珍らしきさまにて、訪らひ聞え給へど、何とも思され

(一) 得意げ

(三) よい歌も生れぬのであらうか

(三) どれ程の止むを得ぬ旅だとして

(四) 御息所は

す。淡々しう心憂き名をのみ流して、淺ましき身の有様を、今始めたらむやうに、程近くなるまゝに、起き臥し歎き給ふ。齋宮は、若き御心に、不定なりつる御出立の、斯く定まり行くを、嬉しとのみ思したり。世の人は、例なき事と、抵悟も哀れがりも様々に聞ゆべし。何事も、人にもどき扱はれぬ際は安げなり。なかなか世に抜け出でぬる人の御邊は、所狭き事多くなむ。

十六日、桂川にて御祓し給ふ。常の儀式に優りて、長奉送使など、さらぬ上達部も、やんごとなく覺えある

桐壺院

を擇らせ給へり。院の御心寄せもあればなるべし。出で給ふ程、大將殿より例の盡きせぬ事ども聞え給へり。かけまくも畏き御前にとて、木綿に付けて、

前坊

源 鳴る神だにこそ

大臣一六條御息所

八洲守る國つ御神も心あらば飽かぬ別れの中をことわれ

源氏

思ひ給ふるに、飽かぬ心地し侍るかな。

とあり。いと騒がしき程なれど、御返りあり。宮の御をば、女別當して書かせ給へり。

齋國つ神空にことわる中ならばなほざり事を先づや正さむ

大將は、御有様ゆかしうて、内裏にも参らまほしう思せど、打棄てられて見送らむも、人悪き心地し給へば、思し留まりて、つれ／＼に眺め居給へり。宮の御返りの大人々々しきを、微笑みて見居給へり。御年の程よ

(一) 出發の日が

(三) 母君の附添ひは

(六) 伊勢まで送る役

し鳴る神も思ふ仲

(一〇) 齋宮の別當

(二) 何時下向ときま

(四) 非難

(五) 注目的になつ

をばさくるものか

(二) 君のこれまでの

るやらわからなかつた

(七) 齋宮の

(八) 天の原ふみ轟か

は(古今、戀四)

(三) 齋宮母子の御暇乞の参内の

りはをかしうもおはすべきかなと、たゞならず。斯様に例に違へる煩はしさに、必ず心懸かる御癖にて、いとよう見奉りつべかりし幼稚き御程を、見ずなりぬること妬けれ。世の中定めなければ、對面するやうもありなむかしなど思す。心にくく由ある御けはひなれば、物見車多かる日なり。申の時に、内裏に参り給ふ。御息所、御輿に乗り給へるにつけても、父大臣の限りなき筋に思し心ざして、いつき奉り給ひし有様變りて、末の世に内裏を見給ふにも、物のみ盡きせず哀れに思さる。十六にて故宮に参り給ひて、二十にて後れ奉り給ふ。三十にてぞ、今日また九重を見給ひける。

思 そのかみを今日はかけじと忍ぶれど心のうちに物ぞ悲しき

齋宮は十四にぞなり給ひける。いと美しうおはする様を、麗しうし奉り給へるぞ、いとゆゝしきまで見え給ふを、帝御心動きて、別れの御櫛奉り給ふ程、いと哀れにて、潮垂れさせ給ひぬ。出で給ふを待ち奉るとして、八省に立て續けたる。出車どもの袖口色合も、目慣れぬさまに心憎き氣色なれば、殿上人どもも、私わたくしの別れ惜しむ多かり。暗う出で給ひて、二條より洞院の大路を折れ給ふほど、二條院の前なれば、大將の君いと哀れに思されて、櫛に挿して、

源 振捨てて今日は行くとも鈴鹿川八十瀬の浪に袖は濡れじや

と聞え給へれど、いと暗う物騒がしき程なれば、又の日、關の彼方よりぞ、御返しある。

- (一) 源は
- (二) 齋宮の幼時を
- (三) 齋宮は一代代り故
- (四) 皇后にもと
- (五) 大極殿に於ける
- (六) 八省院。大極殿
- (七) 供人の
- (八) 後悔の
- (九) 逢坂の

額に櫛を挿し、京を顧るなど仰せられる

源 鈴鹿川八十瀬の浪に濡れじや伊勢まで誰か思ひおこせむ

事そぎて書き給へるしも、御手いと由々しく艶きたるに、哀れなる氣を少し添へ給へらましかばと思す。霧いたう降りて、たゞならぬ朝ぼらけに、打眺めて獨言ちおはす。

源 行く方を眺めも遣らむこの秋は逢坂山を霧な隔てそ

西の對にも渡り給はで、人遣りならず、物寂しげに眺め暮し給ふ。まして旅の空は、いかに御心盡しなる事多かりけむ。

院の御惱み、神無月になりては、いと重くおはします。世の中に惜しみ聞えぬ人なし。内裏にも思し敷きて行幸あり。弱き御心地にも春宮の御事を、返す／＼聞えさせ給ひて、次には大將の御事、與侍りつる世に變らず、大小の事を隔てず、何事も御後見と思せ。齡の程よりは、世を政たむにも、をさ／＼憚りあるまじうなむ見給ふる。必ず世の中保つべき相ある人なり。さるによりて、煩はしさに、親王にもなさず、直人にて、朝廷の御後見をさせせむと、思う給へしなり。その心違へさせ給ふな」と、哀れなる御遺言ども多かりけれど、女のまねぶべき事にしあらねば、この片端だに傍痛し。帝も、いと悲しと思して、更に違へ聞えさせ給ふ。返す／＼聞えさせ給ふ。御容貌もいと清らに、老成優らせ給へるを、嬉しく頼もしく見奉らせ給ふ。限りあれば急ぎ還らせ給ふにも、なか／＼なる事多くなむ。春宮も、一度にと思召しけれど、物騒がしきにより、日を更へて渡らせ給へり。御年の程よりは、大人び美しき御様にて、戀しと思ひ聞えさせ給ひける積りに、何心もなく嬉しと思して、見奉り給ふ御氣色いと哀れなり。中宮は涙に沈み給へるを、見奉

- (一) 禁上
- (二) 朱雀院
- (三) 私の在世中
- (四) 源を
- (五) 院は帝の
- (六) 春宮が院を
- (七) 院が

らせ給ふにも、さまざま御心亂れて思召さる。萬づの事を聞え知らせ給へど、いと物果敢なき御程なれば、後めたく悲しう見奉らせ給ふ。大將にも、朝廷に仕う奉り給ふべき御心遣ひ、この宮の御後見し給ふべき事を、返すく宣はす。夜更けてぞ歸らせ給ふ。残る人なく仕う奉りてのしる様、行幸に劣る差別なし。飽かぬ程にて還らせ給ふを、いみじう思召す。

大后も参り給はむとするを、中宮の斯く添ひおはするに御心置かれて、思しやすらふ程に、おどろくしき様にもおはしませで、崩れさせ給ひぬ。足を空に思ひ惑ふ人多かり。御位を去らせ給ふと言ふばかりにこそあれ、世の政を鎮めさせ給へる事も、我が御世の同じ事にておはしまいつるを、帝はいと若うおはします。祖父大臣、いと急にさがなうおはして、その御儘になりなむ世を、如何ならむと、上達部・殿上人皆思ひ歎く。中宮・大將殿などは、まして勝れて物も思し分かれず、後々の御事など、孝じ仕う奉り給ふさまも、そこらの御子達の御中に勝れ給へるを、ことわりながらいと哀れに世の人も見奉る。藤の御衣に褰れ給へるにつけても、限りなく清らに心苦しげなり。去年今年と打續き、斯かる事を見給ふに、世もいと味氣無う思さるれば、斯かる序にも、先づ思し立たる事はあると、また様々の御羈絆多かり。御四十九日までは、女御・御息所達、皆院に集ひ給へりつるを、過ぎぬれば、散りく罷出給ふ。十二月の二十日なれば、大方の世の中綴ぢむる空の氣色につけても、まして晴る世無き中宮の御心の中なり。大后の御心をも知り給へれば、心に任せ給へらむ世のはしたなく住み憂からむを思すよりも、馴れ聞え給へる年頃の御有様を思ひ出

- (一) 春宮に
- (二) 弘徽殿
- (三) 院は今まで
- (四) 弘徽殿の父右大臣
- (五) せつかち
- (六) 源が喪服に
- (七) 葵上の死
- (八) 出家
- (九) これからは弘徽殿の

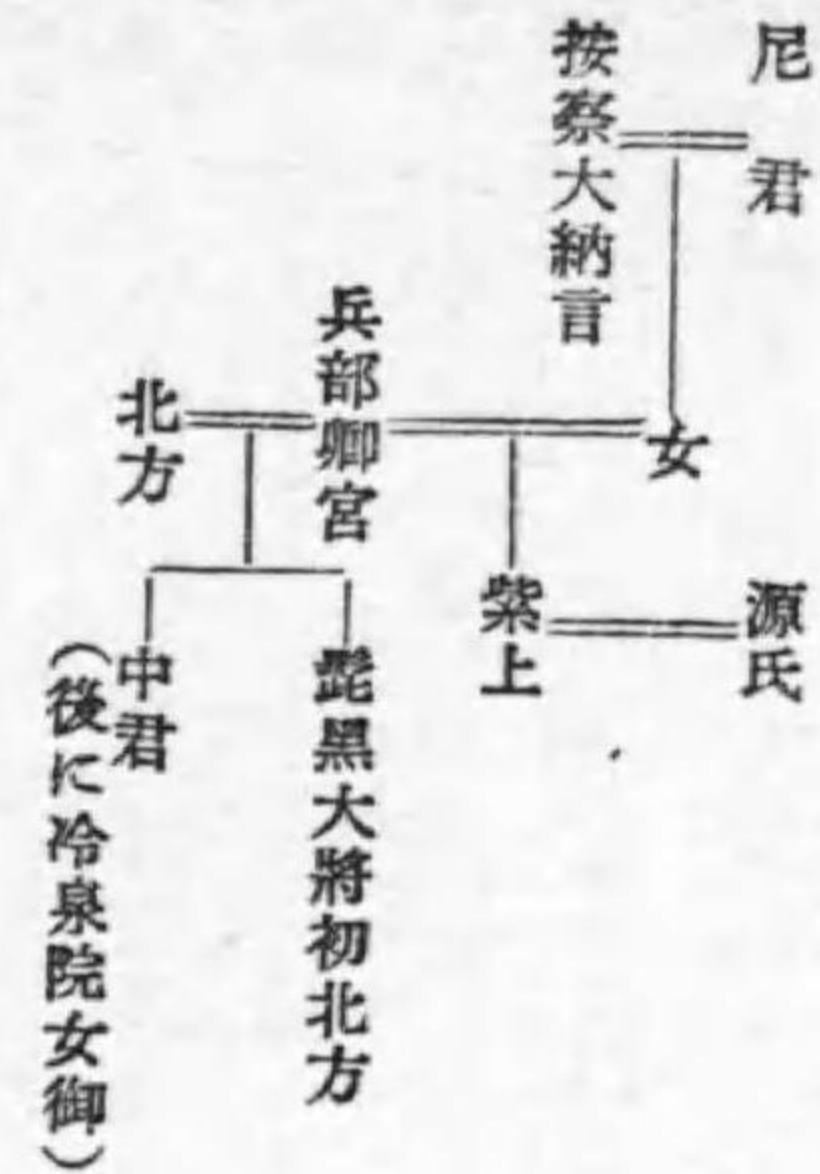
で聞え給はぬ時の聞なきに、斯くてもおはしますまじう、皆外々へと出で給ふ程、悲しき事限りなし。宮は三條の宮に渡り給ふ。御迎へに、兵部卿の宮参り給へり。雪打散り風烈しうて、院の内やうく人目離れ行きてしめやかなるに、大將殿此方に参り給ひて、舊き御物語聞え給ふ。御前の五葉の雪に萎れて、下葉枯れたるを見給ひて、親王、

兵 蔭廣み頼みし松や枯れにけむ下葉散りゆく年の暮かな
何ばかりの事にもあらぬに、折から物哀れにて、大將の御袖いたう濡れぬ。池の隙なう氷れるに、
源 冴え渡る池の鏡のさやけきに見なれし影を見ぬぞ悲しき
と 思すまゝに、餘り若々しうぞあるや。王命婦、

年暮れて岩井の水も氷閉ぢ見し人影の褪せも行くかな
その序にいと多かれど、さのみ書き續くべき事かは。渡らせ給ふ儀式變らねど、思ひなしに哀れにて、舊き宮は、却りて旅心地し給ふにも、御里住絶えたる年月の程、思し廻らさるべし。
年返りぬれど、世の中今めかしき事なく静かなり。まして大將殿は、物憂くて籠り居給へり。除目の頃など、院の御時をば更にもいはず、年頃劣る差別なくて、御門の邊、所なく立ち込みたりし馬車薄らぎて、侍に宿直物の袋をさく見えず。親しき家司どもばかり、殊に急ぐ事無げにてあるを見給ふにも、今よりは斯くこそはと思ひ遣られて、物すさまじくなむ。御匣笥殿は、二月に尙侍になり給ひぬ。院の御思ひに、

- (一) 五葉の松 (三) 父
- (二) したといふだけで
- (三) 三條宮 (六) 春の縣召
- (四) 藤壺三條宮
- (五) 侍所 (二〇) 臘月夜
- (六) 源の二條院の
- (七) 夜具入れの袋
- (八) 故桐壺院の喪を
- (九) 悲しんで

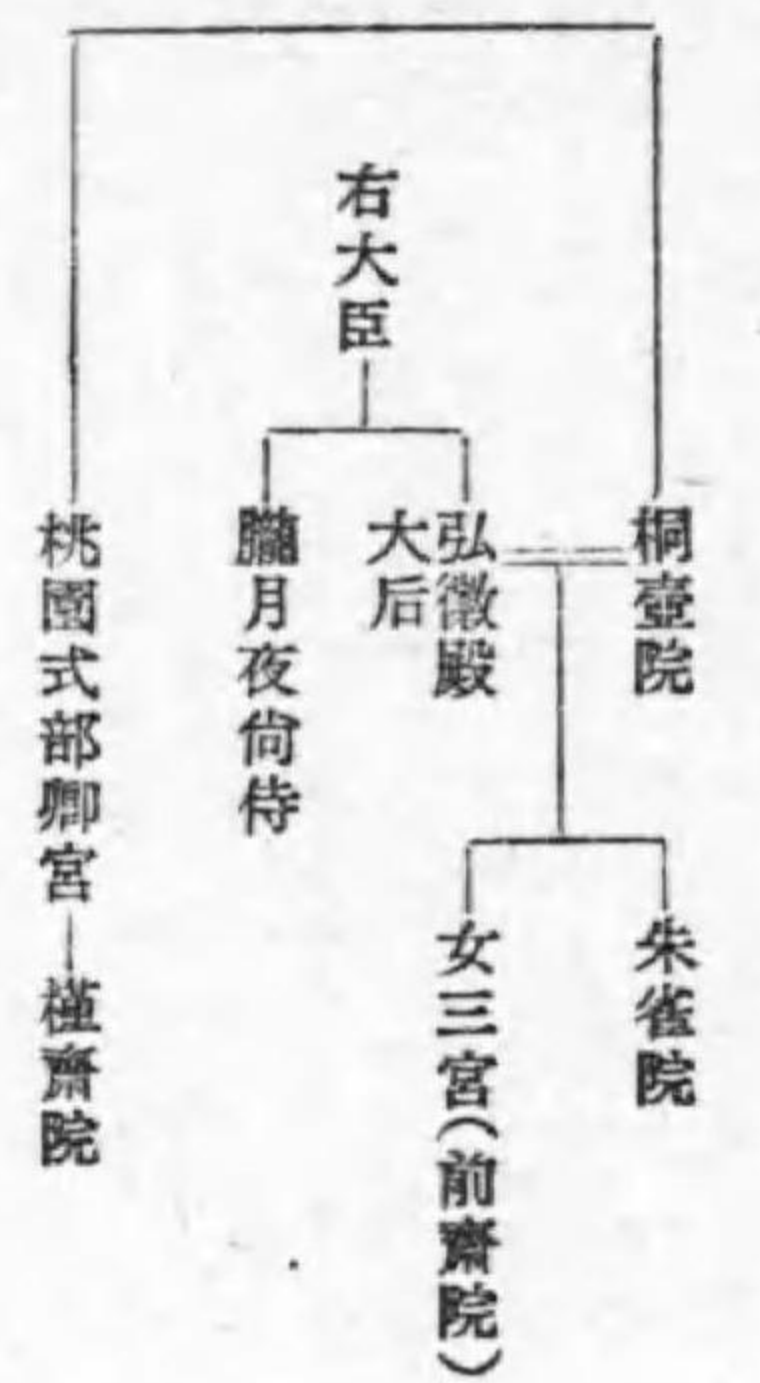
やがて尼になり給へる代りなりけり。やんごとなくもてなして、人柄もいと善くおはすれば、數多参り集まり給ふ中にも、勝れて時めき給ふ。后は、里がちにおはしまして、参り給ふ時の御局には梅壺をしたれば、弘徽殿には侍の君住み給ふ。登花殿の埋れたりつるに、晴れくしうなりて、女房なども數知らず集ひ参りて、今めかしう花やぎ給へど、御心のうちは、思ひの外なりし事どもを忘れ難う思ひ歎き給ふ。いと忍びて通はし給ふ事は、なほ同じさまなるべし。物の聞えもあらば如何ならむと思しながら、例の御癖なれば、



今しも御志増るべかめり。院のおはしましつる世こそ憚り給ひつれ、後の御心逸速くて、方々思し詰めたる事どもの報せむと思すべかめり。事に觸れてはしたなき事のみ出で来れば、斯かるべき事とは思ししかど、見知り給はぬ世の憂さに、立ちまふべくも思されず。左大臣も、すさまじき心地し給ひて、殊に内裏にも参り給はず。故姫君を、引き除きてこの大將の君に聞え附け給ひし御心を、后は思しおきて、宜しうも思ひ聞え給はず。大臣の御中も、固よりそばくしうおはするに

- (一) 前侍の 弘徽殿
- (二) 今までは登花殿に引込んで
- (三) 源との交渉
- (四) 文を
- (五) 葵上
- (六) 朱雀院にと望ん
- (七) だのに
- (八) 左大臣の
- (九) 右大臣が
- (十) 左大臣邸へ

故院の御世には我が儘におはせしを、時移りて、したり顔におはするを、味氣なしと思したるも、理なり。大將は有りしに變らず渡り通ひ給ひて、侍ひし人々をも、なか／＼に細かに思し掟て、若君をかしづき思ひ聞え給へる事限りなければ、哀れに有り難き御心と、いとゞいたづき聞え給ふ事ども同じさまなり。限りなき御覺えの、餘り物騒がしきまで暇なげに見え給ひしを、通ひ給ひし所々も、方々に絶え給ふ事どもあり。輕々しき御忍び歩行も、あいなる思しなりて、殊にし給はねば、いと長閑やかに、今しもあらまほしき御有様なり。西の對の姫君の御幸ひを、世の人も愛で聞ゆ。少納言なども、人知れず、故尼上の御祈禱の驗と見奉る。父親王も思ふさまに聞え交し給ふ。嫡腹の限りなくと思すは、はか／＼しうもえあらぬに、妬げなる



事多くて、繼母の北の方は、安からず思すべし。昔物語に、殊更に作り出でたるやうなる御有様なり。齋院は御服にて、下り居給ひにしかば、朝顔の姫君は、代りに居給ひにき。賀茂の齋院には、孫王の居給ふ例多くもあらざりけれど、さるべき女親王やおはせざりけむ。大將の君、年月経れど、猶御心離れ給はざりつるを、斯う筋異になり給ひぬれば、口惜しと思す。中將に

昔づれ給ふ事も同じ事にて、御文などは絶えざるべし。昔に變る御有様などをば、殊に何とも思したらず、斯様の果敢なし事どもを、紛るゝ事無きまゝに、此方彼方と思し惱めり。帝は、院の御遺言遠へず、哀れに思したれど、若うおはします中にも、御心なよびたる方に過ぎて、強き所おはしまさぬなるべし、母后・祖父大臣とり／＼にし給ふ事は、え背き給はず、世の政御心に叶はぬやうなり。煩はしさのみ増れど、侍の君は、人知れぬ御志通へば、わり無くても覺束なくはあらず。隙を伺ひ

- (一) 紫
- (二) 兵部
- (三) 紫の
- (四) 賀茂
- (五) 朝顔宮に
- (六) 朝顔の侍女
- (七) 以前と變つた威勢の衰へた自分の
- (八) 源を大切に
- (九) 進へぬ事はない
- 卿官の正妻の女達
- 齋院。故桐壺院第三皇女

て、例の夢のやうに聞え給ふ。かの昔覺えたる細殿の局に、中納言の君紛らはして入れ奉りたり。朝夕に見奉る人だに、飽かぬ御様なれば、まして珍らしき程にのみある御對面の、いかでかは疎かならむ。女の御様も、實にぞめたき御盛りなる。重りかなる方は如何あらむ、をかしう艶き若びたる心地して、見まほしき御けはひなり。程なく明け行くにやと覺ゆるに、唯此處にしも「宿直申し侍ふ」と聲作るなり。又この邊に隠るへたる近衛司ぞあるべき。腹穢き傍輩の教へおこするぞかしと、大將は聞き給ふ。をかしきものから煩はし。此處彼處尋ね歩き、官人「寅一つ」と申すなり。女君、

右大臣
頭中將
露黒大將

心からかたぐ袖を濡らすかなあくと教ふる聲につけても
と宣ふ様、果敢無だちていとをかし。

承香殿女御

静心無くて出で給ひぬ。夜深き曉月夜のえもいはず霧り渡れるに、いといたう寒れ
て振舞ひなし給へるしも、似る物なき御有様にて、承香殿の御兄の頭中將、藤壺よ

り出でて、月の少しく隈ある立部の下に立てりけるを、知らで過ぎ給ひけむこそいとほしけれ。もどき聞ゆるやうもありなむかし。

大將の君は、つれづれに思さるれば、秋の野も見給ひがてら、雲林院に詣で給へり。故母御息所の御兄の律師の籠り給へる坊にて、法文など読み、行ひせむと思して、二三日おはするに、哀れなる事多かり。紅葉のや

(一) 花宴卷、一四六頁參照
(二) 臙の侍女 (三) 源の

(四) 近衛武官が
(五) 他に

(六) 此の邊とその
夜行の官人に

(七) 午前四時

(八) 明くと厭くに掛く
(九) 朱雀院女御
(一〇) 葵上の兄とは別

うく色づき渡りて、秋の野のいと艶きたるなど見給ひつゝ、故郷も忘れぬべく思さる。法師輩の才ある限り召し出でて、論議せさせて聞召させ給ふ。所柄に、いと世の中の常なさを思し明しても、なほ「憂き人しもぞ」と思し出でらるゝおし明け方の月影に、法師輩の関伽奉るとて、からくくと鳴らしつゝ、菊の花、濃き薄き紅葉など、折り散らしたるも果敢なけれど、この方の營みは、此の世もつれづれならず、後の世將た頼もしげなり。律師のいと尊き聲にて「念佛衆生攝取不捨」と打述べて行ひ給へるがいと羨ましかれば、なぞやと思しなるに、先づ姫君の心に懸かりて、思ひ出でられ給ふぞ、いと悪き御心なるや。例ならぬ日數も、覺束なくのみ思さるれば、御文ばかりぞ繁う聞え給ふめる。

雲林院の律師
桐壺更衣
源氏

桐壺帝

増りてなむ。聞きさしたる事ありて、やすらひ侍る程を如何に。
浅茅生の露の宿りに君を置きて四方の嵐ぞしづ心なき

など細やかなるに、女君も打泣き給ひぬ。御返し白き色紙に、

風吹けば先づぞ亂るゝ色變る浅茅が露にかゝるさゝがに
とのみあり。墨御手はいとをかしうのみなり増るものかな一と獨言ちて、美しと微笑み給ふ。常に書き交し

(一) 天の戸をおしあ
け方の月見れば憂
き入しもぞ戀しか

りける(新古今、
戀四)
(三) 觀無量壽經の句

(三) 何故自分は出家
出來ないか

(五) 教義の聽聞を
(六) 秋風の露の宿り
に君を置きて塵を

出でぬることぞ悲
しき(新古今、哀
傷、一條院)

給へば、我が御手にいとよく似て、今少し艶かしう、女しき所書き添へ給へり。何事につけても、けしうはあらず生ふし立てたりかしと思す。吹きかふ風も近き程にて、齋院にも聞え給ひけり。中將の君に、
源 斯く旅の空になむ物思ひに憧れにけるを、思し知るにもあらじかし。
など恨み給ひて、御前には、

源 かけまくも畏けれどもそのかみの秋思ほゆる木綿襦かな
昔を今にと思ひ給ふるも甲斐なく、取返されむ物のやうに。

と馴々しげに、唐の淺緑の紙に、神に木綿つけなど、神々しうしなして参らせ給ふ。御返り中將、

中 紛るゝ事なくて、來し方の事を思ひ給へ出づるつれづれのまゝには、思ひ遣り聞えさする事多く侍れど、甲斐なくのみなむ。

と少し心留めて多かり。御前のは、木綿の片端に、

源 「そのかみや如何はありし木綿襦心に掛けて忍ぶらむ故

近き世に」とぞある。御手細やかにあらねど、らうくじう、草などをかしうなりにけり。まして、朝顔も老成優り給へらむかしと、思ひ遣るもたゞならず、怖ろしや。あはれこの頃ぞかしと、野宮の哀れなりし事と思し出でて、怪しうやうの物と、神怨めしう思さるゝ御癖の見苦しきぞかし。わり無う思さばさもあり

- (一) 朝顔の侍女
- (二) 齋院は
- (三) 古の賤の苧環
- (四) 取返すものにも
- (五) 近い世には一向
- (六) 朝顔も御息所も
- (七) 未詳 (六) 御息所
- (八) 不思議に同じ様に
- (九) 神の憚の爲意に任
- (十) せぬと (八) 思ひ
- (十一) の儘になつた
- (十二) 身と思はむ(典入)
- (十三) 存じません。引歌
- (十四) 勢物語
- (十五) 山寺にはいみじき光行ひ出し奉れ
- (十六) 山寺にはいみじき光行ひ出し奉れ
- (十七) 山寺にはいみじき光行ひ出し奉れ
- (十八) 山寺にはいみじき光行ひ出し奉れ
- (十九) 山寺にはいみじき光行ひ出し奉れ
- (二十) 山寺にはいみじき光行ひ出し奉れ

ぬべかりし年頃は、長閑に過し給ひて、今は悔しう思さるべかめるも、怪しき御心なりや。院も、斯くなべてならぬ御心ばへを見知り聞え給へれば、邂逅なる御返しなどは、えしも持て離れ聞え給ふまじかめり。少しあいなき事なりかし。

六十巻といふ文讀み給ひ、覺束なき所々、解かせなどしておはしますを。山寺にはいみじき光行ひ出し奉れりと、佛の御面目ありと、卑し法師輩まで喜び合へり。しめやかにて、世の中を思ほし續くるに、歸らむ事も物憂かりぬべけれど、一人の御事思し遣るが羈絆なれば、久しうもえおはしますで、寺にも御誦經嚴しうせさせ給ふ。あるべき限り上下の僧ども、その邊の山賤まで物賜び、尊き事の限りを盡くして出で給ふ。見奉り送るとて、此面彼面に卑しきはぶるひ人ども集まり居て、涙を落しつゝ見奉る。黒き御車の内にて、藤の御杖に簞れ給へれば、殊に見え給はねど、仄かなる御有様を、世になく思ひ聞ゆべかめり。

女君は、日頃の程に、老成優り給へる心地して、いといたう静まり給ひて、世の中如何あらむと思へる氣色の、心苦しう哀れに覺え給へば、あいなき心の、様々亂るゝや著からむ。「色變る」とありしもらうたう覺えて、常より殊に語らひ聞え給ふ。

先づ内裏の御方に参り給へれば、長閑やかにおはします程にて、昔今の御物語聞え給ふ。御容貌も、院にいとよう似奉り給ひて、今少し艶かしき氣添ひて、懐かしう和やかにぞおはします。互に哀れと見奉り給ふ。尙侍の君の御事も、なほ絶えぬさまに聞召し、氣色御覽する折もあれど、何かは、今始めた事ならばこ

(一) 朝顔齋院

(二) 天合六十巻

(三) 嘆歌する人。老

(四) 前出紫上の歌

(五) 朱雀院 (九) 帝は

源と臙月夜との間も

そあらめ、有り初めにける事なれば、さも心交さむに、似げなかるまじき人の間なりかしとぞ思しなして、咎めさせ給はざりける。萬づの御物語、文の道の覺東なく思召さるゝ事どもなど、問はせ給ひて、又すきすきしき歌語りなども、互に聞え交させ給ふ序に、かの齋宮の下り給ひし日の事、容貌のをかしうおはせしなど、語らせ給ふに、我も打解けて、野宮の哀れなりし。曙も、皆聞え出で給ひてけり。二十日の月やうくさし出でてをかしき程なるに、童遊びなどもせまほしき程かな」と宣はす。

大將は、世の中煩はしう覺え給ひて、尙侍の君にも音づれ聞え給はで、久しうなりにけり。初時雨いつしかと氣色だつに、如何思しけむ、彼より、

木枯の吹くにつけつゝ待ちし間に覺東なさの頃も經にけり

と聞え給へり。折も哀れに、強ちに忍び書き給ひつらむ御心ばへも憎からねば、御使留めさせ給ひて、唐紙ども入れさせ給へる御厨子開けさせ給ひて、なべてならぬを選り出でつゝ、筆なども心殊に引整ひ給へる氣色艶なるを、御前なる人々、誰ばかりならむとつきじらふ。

聞えさせても甲斐無き物懲にこそ、無下に頼れにけれ。身のみ物憂き程にて、

あひ見ずて忍ぶる頃の涙をもなべての秋の時雨とや見る

心の通ふとならば、如何にながめの空も物忘れし侍らむ。

など、細やかににけり。斯様に驚かし聞ゆる類多かめれど、情なからず打返言ち給ひて、御心には深う染まざるべし。

(一) 御返事の無い

(二) 數ならぬ身のみ物憂く思ほえて待たるゝまでになりけるかな(細流抄)

(三) 長雨に掛く

中宮は院の御果の事に打續き、御八講の準備を、様々に心遣ひせさせ給ひけり。十一月の朔日頃、御國忌なるに、雪いたう降りたり。大將殿より宮に聞え給ふ。

源別れにし今日は來れども見し人に行き逢ふ程を何時と頼まむ

何處にも、今日は物悲しう思さるゝ程にて、御返りあり。

藤ながらふる程は憂けれど行きめぐり今日はその世に逢ふ心地して

筋變り今めかしうはあらねど、人には異に書かせ給へり。今日は哀れなる雪の霰に濡れく行ひ給ふ。



十二月十餘日ばかり、中宮の御八講なり。いみじう尊し。日々に供養せさせ給ふ御經より初め、玉の軸、羅の表紙、帙籠の飾も、世に無き様に整へさせ給へり。さらぬ事の清らだに尋常ならずおはしませば、ましてことわりなり。佛の御飾、花机の覆などまで、眞の極樂思ひ遣らる。初めの日は先帝の御料、次の日は母後の御爲、又の日は院の御料、五卷の日なれば、上達部なども、世の慎

ましさをえしも憚り給はで、いと數多参り給へり。今日の講師は、心殊に選らせ給へれば、薪樵る程より打初め、同じう言ふ言の葉も、いみじう尊し。親王達も、様々の捧物捧けて廻り給ふに、大將殿の御用意など、

- (一) 一週忌の法事
- (二) 法華經八卷を講ぜしめる法會。法華八講
- (三) 桐壺院祥月命日

- (四) 雪に掛く
- (五) 書風
- (六) 竹で編んで經を包むもの
- (七) 藤壺は

- (八) 花を載せる机
- (九) 五日間の八講の
- (一〇) 第三日。五の巻の日で、薪の行道の式がある

- (一一) 法華經を我が得し事は薪樵り菜摘み水汲み仕へてぞ得し(拾遺、哀傷、行基)これが行道

- の歌で、法華經卷五、提婆品の偈に「採薪及果疏(隨)時恭敬與」とあるに出でゐる

なほ似るもの無し。常に同じ事のやうなれども、見奉る度毎に、珍らしからむをば、如何はせむ。果の日は我が御事を結願にて、世を背き給ふ由佛に申させ給ふに、皆人々驚き給ひぬ。親王は、半の程に立ちて入り給ひぬ。心強う思し立つさまを宣ひて、果つる程に、山の座主召して、忌む事受け給ふべき由宣はす。御伯父の横川の僧都近う参り給ひて、御髪下し給ふ程に、宮の内揺りて、忌々しう泣き満ちたり。何となき老い衰へたる人だに、今はと世を背く程は、怪しう哀れなる業を、まして、かねて御氣色にも出し給はざりつる事なれば、親王もいみじう泣き給ふ。参り給へる人々も、大方の事のさまも、哀れに尊ければ、皆袖濡らしでぞ歸り給ひける。

司召の頃、この宮の人は賜はるべき官も得ず、大方の道理にても、宮の御賜りにても、必ずあるべき加階などをだにせずなどして、歎く類いと多かり。斯くても、何時しかと御位を去り、御封などの留まるべきにもあらぬを、事託けて變る事多かり。皆かねて思し捨ててし世なれど、宮人共も、據り所なげに悲しと思へる氣色どもにつけてぞ、御心動く折々あれど、我身を無きになしても、春宮の御代を平らかにおはしまさばとのみ思しつゝ、御行ひ弛みなく勤めさせ給ふ。

左大臣も、公私引き變へたる世の有様に、物憂憂く思して、致仕の表奉り給ふを、帝は、故院の、やんごとなく重き御後見と思して、長き世の固めと聞え置き給ひし御遺言を思召すに、捨て難きもの思ひ聞え給へるに、甲斐無き事と、度々用ゐさせ給はねど、せめて返さひ申し給ひて、籠り居給ひぬ。今はいと一族

(一)兵部卿宮 (二)諫止する爲に簾中へ

(三)叡山天台座主 (四)戒律 (五)藤壺の

(六)除目。こゝは實は縣石をさす

(七)藤壺が出家はし

(八)辭表 (九)右大臣方の

のみ、返すく榮え給ふ事限りなし。世の重しと物し給へる大臣の、斯く世を遁れ給へば、朝廷も心細う思され、世の人も心ある限りは歎きけり。御子どもは、いづれともなく、人柄目易く世に用ゐられて、心地よげに物し給ひしを、こよなう鎮まりて、三位中將なども、世を思ひ沈める様こよなし。かの四の君をも、なほ離れくゝに打通ひつゝ、めざましうもてなされたれば、心解けたる御婿の中にも入れ給はず。思ひ知れとにや、この度の司召にも漏れぬれど、いとしも思ひ入れず、大將殿斯う静かにておはするに、世は果敢なきものと見えぬるを、ましてことわりと思しなして、常に参り通ひ給ひつゝ、學問をも遊びをも諸共にし給ふ。往時も物狂ほしきまで、挑み聞え給ひしを思し出でて、互に今も果敢なき事につけつゝ、流石に挑み給へり。春秋の御讀經をばさるものにて、臨時にも、さまゝ尊き事どもをせさせ給ひなどして、又徒らに暇ありげなる博士ども召し集めて、文作・韻塞などやうの、すさび業どもをしなど心を遣りて、官仕をもをさし給はず、御心に任せて打遊びておはするを、世の中には、煩はしき事どもやうく言ひ出づる人々あるべし。

夏の雨長閑に降りて、つれづれなる頃、中將、さるべき集ども、數多持たせて参り給へり。殿にも、文殿開けさせ給ひて、まだ開かぬ御厨子どもの、珍らしき古集の故無からぬ、少し選り出でさせ給ひて、その道の人々、態とはあらねど數多召したり。殿上人も大學のもの、いと多う集ひて左右にこまどりに方分たせ給へり。賭物どもなど、いと二なくて挑み合へり。塞ぎ持て行く儘に、難き韻の文字どもいと多くて、覺えある博士

(一)もとの頭中將 (二)北方、右大臣の四君

(三)右大臣方では

(四)詩作 (五)古い詩の韻字を隠して當てさせる遊び

(六)駒取り。入れちがひに。

どもなどの惑ふ所々を、時々打宣ふ様、いとこよなき御才の程なり。如何で斯うしも足らひ給ひけむ。なほさるべきにて、萬づの事人に勝れ給へるなりけり」と愛で聞ゆ。遂に右負けにけり。二日ばかりありて、中将負けわざし給へり。事々しうはあらで、艶きたる檜破子ども、賭物など様々にて、今日も例の人々多く召して文など作らせ給ふ。階の下の薔薇、氣色ばかり咲きて、春秋の花盛りよりもしめやかにをかしき程なるに、打解け遊び給ふ。中将の御子の、今年始めて殿上する、八つ九つばかりにて、聲いと面白く、笙の笛吹きなどするを、慈み玩び給ふ。四の君腹の次郎なりけり。世の人の思へる寄せ重くて、覺え殊に傳けり。心ばへもかどくしう、容貌もをかしうて、御遊びの少し亂れゆく程に、高砂を出して諺ふ、いと愛し。大將の君、御衣脱ぎて纏頭給ふ。例よりは打亂れ給へる御顔の匂ひ、似るものなく見ゆ。羅の直衣單衣を着給へるに、透き給へる肌つき、ましていみじう見ゆるを、年老いたる博士どもなど、遠く見奉りて涙落しつ居たり。「逢はましものを百合の」と歌ふ綴めに、中将御土器参り給ふ。

頭それがと今朝開けたる初花に劣らぬ君が匂ひをぞ見る
微笑みて取り給ふ。

源「時ならで今朝咲く花は夏の雨に萎れにけらし匂ふ程無く

- (一) 源が
- (二) 中将方
- (三) 勝負に負けた方がする響應
- (四) 高砂の、さいさ

どの、高砂の、をのへに立てる、白玉椿、玉柳、それがと、サン、ましもがと、ましも

がと(下略)(催馬榮、高砂)
(五)今朝咲いたる、初花に、逢はましものを、さゆりば

なの。(高砂の結びの句)「さゆりば」は「さゆりばな」といふ語が論はれる爲に斯く聞えるか

(六)註(四)参照
(七)註(五)参照

衰へにたるものを」と打騒動きて、らうがはしく聞しめしなすを、咎め出でつゝ強ひ聞え給ふ。多かめりし事どもも、斯様な折の眞ほならぬ事、數々に書きつくる、心無きわざとか、貫之が諫めたるゝ方にて、むつかしければ止めつ。皆この御事を譽めたる筋にのみ、倭のも唐のも作りつゞけたり。我が御心地にもいたう思し驕りて、文王の子武王の弟」と、打誦じ給へる、御名告さへぞ實にめでたき。帥の宮も常に渡り給ひつゝ、御遊びなどもをかしうおはする宮なれば、今めかしき御間どもなり。



その頃尙侍の君罷出給へり。瘧病に久しう悩み給ひて、禁厭なども心安くせむとてなりけり。修法など始めて、癒り給ひぬれば、誰もく嬉しう思すに、例の珍らしき隙なるをと、聞え交し給ひて、わり無きさまにて夜なく對面し給ふ。いと盛りに、賑はしきはひし給へる人の、少し打惱みて、瘦々になり給へる程、いとをかしげなり。後の宮も一所におはする頃なれば、けはひいと怖ろしけれど、斯かる事も増る御癖なれば、いと忍びて度重なり行けば、氣色見る人々もあるべかめれど、煩はしうて、宮にはさなむとは啓せず。大臣、將た思ひかけ給はぬに、雨俄におどろくしう降りて、雷いたう鳴り騒ぐ曉に、殿

- (一) 中将が御土器を
- (二) 難ずる
- (三) 和歌も漢詩も
- (四) 我文王子、武王

弟、成王叔父。我於天下不賤矣。(史記) 源自身を周公になぞらへた

(五) 發兵部卿、源の弟宮
(六) 朧月夜

(七) 源と
(八) 弘徽殿皇太后
(九) 右大臣

の君達、官司など立ち騒ぎて、此方彼方の人目繁く、女房どもも懼ぢ惑ひて近う集ひ参るに、いとわり無く、出で給はむ方なくて、明け果てぬ。御帳の周りに、人々繁く竝み居たれば、いと胸潰らはしく思さる。心知りの人二人ばかり、心を惑はす。雷鳴り止み、雨少し小歇みぬる程に、大臣渡り給ひて、先づ宮の御方におはしけるを、村雨の紛れにて、え知り給はぬに、軽らかにふと這ひ入り給ひて、御簾上げ給ふまゝに、右大臣「如何にぞ。いとうたてありつる夜の様に、思ひ遣り聞えながら、参り來でなむ。中將・宮の亮など侍ひつや」など、宣ふけはひの舌疾にあはつけきを、大將は物の紛れにも、左大臣の御有様ふと思し比べられて、噓しへなくぞ微笑まれ給ふ。實に入り果ても宣へかした。尙侍の君いと佗しう思されて、やをら膝行り出で給ふに、面のいたう赤みたるを、猶惱ましう思さるゝにやと見給ひて、有など御氣色の例ならぬ。物怪などのむつかしきを、修法延べさすべかりけり」と宣ふに、薄二藍なる帯の御衣に纏はれて引き出でられたるを見つけ給ひて、怪しと思すに、又疊紙の手習などしたる、御几帳の下に落ちたりけり。これは如何なる物どもぞと、御心驚かれて、有彼れは誰がぞ。氣色異なる物のさまかな。賜へ。それ取りて誰がぞと見侍らむ」と宣ふにぞ、打見かへりて、我も見つけ給へる。紛らはすべき方も無ければ、如何は答へ聞え給はむ、我にもあらでおはするを、子ながらも恥かしと思すらむかしと、さばかりの人は思し憚るべきぞかし。されどいと急に、和めたる所おはせぬ大臣の、思しも廻さずなりて、疊紙を取り給ふまゝに、几帳より見入れ給へるに、いといたうなよびて、慎ましからず添ひ臥したる男もあり。今ぞやをら顔引隠して、兎角紛ら

(一) 源も臙も

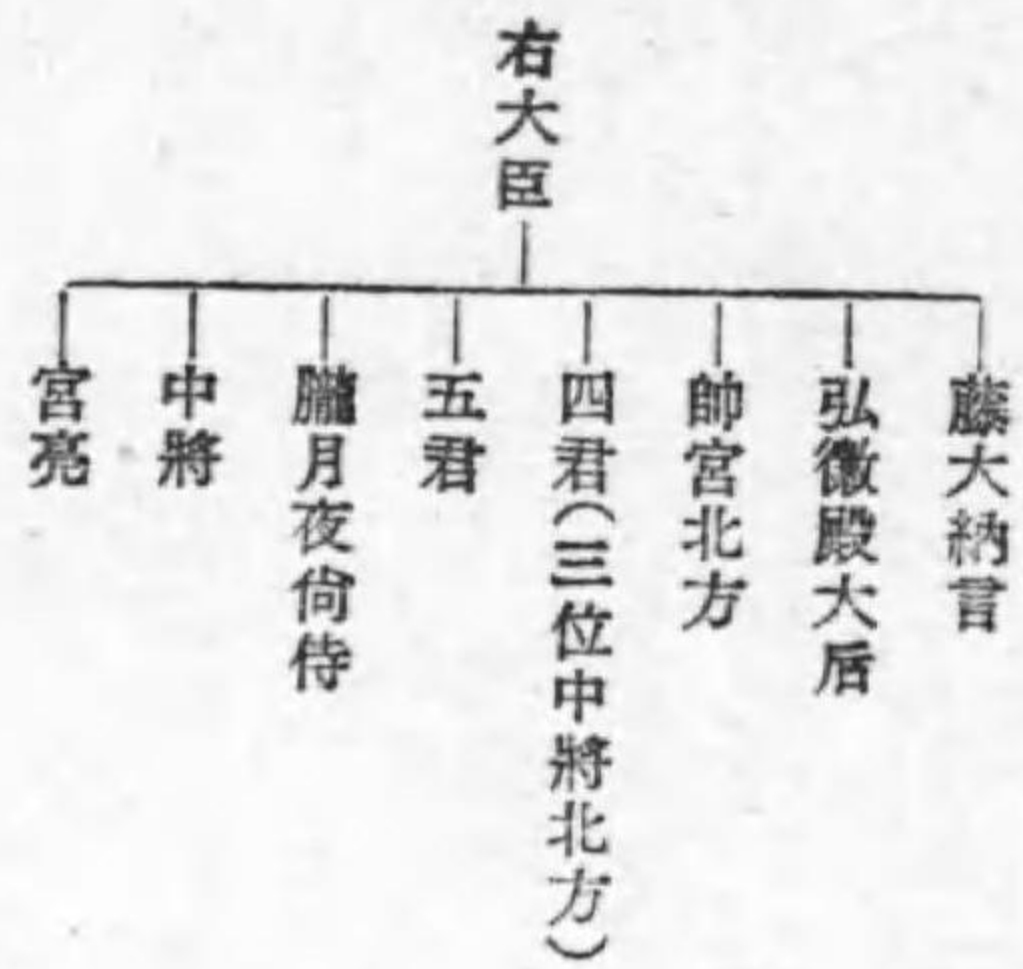
(二) 共に大后の弟で前に四位少將・右中辨と見える人々か。宮の亮は皇太后宮亮

(三) 紅と藍の間の薄いもの

(四) 臙月夜の

(五) 臙

はす。あさましろ、目さましろ、心疚しけれど、直面にはいかでか顯はし給はむ。目も昏るゝ心地すれば、この疊紙を取りて、寢殿に渡り給ひぬ。尙侍の君は、我れかの心地して死ぬべく思さる。大將殿もいとほしう、遂に用なき振舞の積りて、人の抵悟を負はむとする事と思せど、女君の心苦しき御氣色を、とかく慰め聞え給ふ。



大臣は、思ひの儘に、籠めたる所おはせぬ本性に、いと老の御僻さへ添ひ給ひにたれば、何事にかは滞り給はむ、ゆくゝと宮にも愁へ聞え給ふ。御斯うゝの事なむ侍る。この疊紙は右大將の御手なり。昔も心免されて有り初めにける事なれど、人柄に萬づの罪を免して、さても見むと言ひ侍りし折は、心も留めず、めざましげにもてなされにしかば、安からず思ひ給へしかど、さるべきにこそはとて、世に穢れたりとも、思し棄つまじきを頼みにて、斯く本意の如く奉りながら、猶その憚りありて、うけばりたる女御なども言はせ侍らぬをだに、飽かず口惜しう思ひ給ふるに、又斯かる事さへ侍りければ、更にいと心憂くなむ思ひなり侍りぬる。男の例とは言ひながら、大將もいと怪しからぬ御心なりけり。齋院をも猶聞え犯しつゝ、忍びに御文通はしなどして、氣色ある事など、人の語り侍りしをも、世の爲のみにもあらず、我が爲にも宜かるまじき事なれば、よも然る思ひ遣りなき業し出でられじとなむ、時の有職と、天の下を靡かし給へる様殊なれば、大將の御心を、疑ひ侍らざりつる」など宣ふに、宮はいとゞし

(一) どしゝ

(二) 大后

(三) 婿に取つてもよいと

(四) 帝の

(五) 肩身の狭い

(六) 儘

き御心なれば、いと物しき御氣色にて、大臣「帝と聞ゆれど、昔より皆人思ひ貶し聞えて、致仕の大臣も、又なく傳く一つ女を、兄の坊にておはするには奉らで、弟の源氏にて幼きが元服の添臥に取分き、又この君をも宮仕にと志して侍りしに、痴がましかりし有様なりしを、誰もく怪しとや思したりし。皆彼の御方にこそ御心寄せ侍るめりしを、その本意違ふさまにてこそは、斯くても侍ひ給ふれど、いとほしさに、如何でさる方にて、人に劣らぬ様にもてなし聞えむ。さばかり妬げなりし人の見る所もありなどこそは、思ひ侍りつれど、強ひて我が心の入る方に、躰き給ふにこそは侍らめ。齋院の御事はまして然も有らむ。何事につけても、朝廷の御方に後安からず見ゆるは、春宮の御世心寄せの異なる人なれば、ことわりになむあめる」と、すくくしう宣ひ續くるに、流石にいとほしう、何と聞えつる事ぞと思さるれば、有さばれ、暫し此の事漏らし侍らじ。内裏にも奏せさせ給ふな。斯くの如罪侍りとも、思し棄つまじきを頼みにて、甘えて侍るなるべし。内々に制し宣はむに、聞き侍らずば、その罪には唯自ら當り侍らむ」など聞え直し給へど、殊に御氣色も直らず。かく一所におはして隙も無きに、慎む所なう、さて入りものせらるらむは、殊更に輕め弄ぜらるゝにこそはと思しなすに、いとどいみじう目ざましく、この序に然るべき事ども構へ出でむに、よき便なりと思し廻らすべし。

(一) 前左大臣
(二) 葵上(桐壺卷參照)

(三) 朧月夜
(四) 宮仕へして
(五) 癩に障る源へのつら當て

(六) 朧は
(七) 源が

(八) 朧は
(九) 朧が自分と
(一〇) 源が

(一一) 源を陥れる方
策を

花散里

(二五五月)

憂き世の淋しさをかこつ源氏・麗景殿女御の閑居訪問——途すがらの中
川の宿と舊き思出——郭公鳴く夜更け花散里姉妹の橋の宿へ



人知れぬ御心づからの物思はしさは、何時と無き事なめれど、斯く大方の世につけてさへ、煩はしう思し亂るゝ事のみ増れば、物心細く、世の中なべて厭はしう思しなるゝに、流石なる事多かり。麗景殿と聞えしは、宮達もおはせず、院隠れさせ給ひて後、いよゝ哀れなる御有様を、唯この大將殿の御心に持て隠されて、過し給ふなるべし。御妹の三の君、内裏邊にて、果敢なく仄めき

給ひし名残、例の御心なれば、流石に忘れも果て給はず、態ともてなし給はぬに、人の御心をのみ盡くし

桐壺院
麗景殿女御

果て給ふべかめるをも、この頃殘る事なく思し亂るゝ世の哀れの種はひには、思ひ出で給ふに、忍び難くて、五月雨の空、珍らしう晴れたる雲間に渡り給ふ。何ばかりの御装ひなく、打襲して、御前なども殊に無く、忍び給へり。

花散里

中川の程おはし過ぐるに、さゝやかなる家の木立など由ばめるに、能く鳴る琴を東琴に調べて搔合はせ、賑ははしく弾き鳴らすなり。御耳留まりて、門近なる所なれば、少し差出でて見入れ給へば、大きな桂の木の追風に、祭の頃思し出でられて、そこはかと無くけはひをかしきを、唯一目見給ひし宿りなりと、思ひ出で給ふに、たゞならず。程經にけるを、おぼめかしくやと愼ましけれど、過ぎ難にやすらひ給ふ。折しも郭公鳴きて渡る。催し聞え顔なれば、御車推し返させ給ひて、例の惟光を入れ給ふ。

源をちかへりえぞ忍ばれぬ郭公仄語らひし宿の垣根に
(一) 花散里
(二) 賀茂祭には冠に葵と桂を附ける

寢殿と思しき屋の、西の端に人々居たり。前々も聞きし聲なりければ、聲作り氣色とりて、御消息聞ゆ。若やかなる氣色ども數多して、おぼめくなるべし。

女郭公語らふ聲はそれながらあな覺束な五月雨の空

殊更に迎ると見れば、(二)「植ゑし垣根も」とて出づるを、人知れぬ心には、妬うも哀れにも思ひけり。さも慎むべき事ぞかし、理にも有れば、流石なり。斯様の際に、筑紫の五節が、らうたげなりしはやと、先づ思し出づ。如何なるにつけても、御心の暇なく苦しげなり。年月を経ても、なほ斯うやうに、見し邊の情は、過し給はぬにしも、なか／＼數多の人の物思ひ種なり。

さてかの本意の所は、思し遣りつるも著く、人目なく靜かにておはする有様を見給ふも、いと哀れなり。先づ女御の御方にて、昔の御物語など聞え給ふに、夜更けにけり。二十日の月さし出づる程に、いと木高き陰ども木暗う見え渡りて、近き橋の薫り懐かしく匂ひて、女御の御けはひ、老成にたれど飽くまで用意あり、貴にらうたげなり。勝れて花やかなる御覺えこそ無かりしかど、睦まじう懐かしき方には、思したりしものをなど、思ひ出で給ふにつけても、昔の事かき列ね思されて、打泣き給ふ。郭公、ありつる垣根のにや、同じ聲に打鳴く。慕ひ來にけるよと思さるゝ程も、艶なりかし。「如何に知りてか」など、忍びやかに打誦し給ふ。

(一) 訝しがる

(二) 門達で失禮

花散りし庭の梢も
茂りあひて植ゑし

垣根もえこそ見分

かね「細流抄」

(三) 女の
今は主ある女なら

(五) 太宰大貳の女。
五節の舞姫を勤め

た女。須磨卷、二
四一頁参照

(六) いにしへのこと語ら

へば時鳥いかに知りて
か古聲のする(古今六
帖、五)

源「橋の香を懐かしみ郭公花散る里を尋ねてぞ訪ふ

往時の忘れ難う思ひ給へらるゝ慰めには、先づ参り侍りぬべかりけり。こよなくこそ紛るゝ事も數添ふ事も侍りけれ。大方の世に隨ふものなれば、昔語りもかき崩すべき人少なうなり行くを、まして如何に、つれづれも紛るゝ事なく思さるらむ」と聞え給ふに、いと更なる世なれど、物をいと哀れと思し續けたる御氣色の淺からぬも、人の御様からにや、多く哀れぞ添ひにける。

女御「人目なく荒れたる宿は橋の花こそ軒のつまとなりけれ

とばかり宣へるも、さはいへど人にはいと殊なりけりと、思し比べらる。西面には、態となく忍びやかに打振舞ひ給ひて覗き給へるも珍らしきに添へて、世に目慣れぬ御様なれば、辛さも忘れぬべし。何や彼やと、例の懐かしく語らひ給ふも、思さぬ事にはあらざるべし。假にも見給ふ限りは、おしなべての際にはあらねばにや、様々につけて、言ふ甲斐無しと思さるゝは無ければにや、憎げなく、我も人も情を交しつゝ、過し給ふなりけり。それをあいなしと思ふ人は、とにかくに變るも、理の世の性と思ひなし給ふ。ありつる垣根も、さ様に有様變りにたる邊なりけり。

(一) 橋の香をなつか
しみ時鳥語らひし
つゝ鳴かぬ日ぞな
き「奥入」

橋の花散る里の時
鳥片戀しつゝ鳴く
日しぞ多き(萬葉
八)

(二) 言ふも更なる
(三) 花散りに比す
(四) 端で、手引の意
に掛けてある

(五) 何と言つても普
通の女に比べれば

(七) 源が
(八) 飽き足らず

須
磨

(二六三月二七三月)

失意の源氏須磨退去の決意——左大臣邸の別離・人々の悲愁——物淋し
 き二條院に紫上との惜別・花散里へ暇乞・朧月夜へ消息——故父帝の北
 山の陵・春宮（冷泉院）へそれらの御暇乞——夜に紛れての離京・藻
 鹽垂る、須磨の佗住居・長雨の頃京と伊勢への消息・返事——心づくし
 の秋闌くる海邊の籠居・中秋明月の述懐——大貳の京上り・五節が人知
 れぬ胸の涙——都の人々の哀愁——冬の須磨——いつき女を奉らむの明
 石入道が願ひ——春浅く三位中將（前の頭中將）の須磨訪問——上巳の
 海邊の祓・大風雨



世の中間と煩はしく、はしたなき事のみ増れば、せめて知らず顔にあり経ても、
 これより勝る事もやと思しなりぬ。かの須磨は、昔こそ人の住處などもありけ
 れ、今は、いと里離れ心すくて、海士の家だに稀になむと聞き給へど、人繁
 くひた、けたらむ住居は、いと本意なかるべし。さりとして都を遠ざからむも、
 故里覺束なかるべきを、人悪くぞ思し亂る。萬づの事、來し方行く末思ひ續

け給ふに、悲しき事いと様々なり。憂きものと思ひ捨てつる世も、今はと住み離れなむ事を思すには、いと
 捨て難き事多かる中にも、姫君の明暮に添へて思ひ歎き給へるさまの心苦しさは、何事にも勝れて哀れなる
 を、行き廻りても復逢ひ見む事を必ずと思さむにてだに、なほ一二日の程、餘所々に明し暮す折々に、
 覺束なきものに覺え、女君も心細うのみ思ひ給へるを、幾年その程と限りある道にもあらず、逢ふを限りに
 隔たり行かむも、定めなき世に、やがて別るべき門出にもやといみじう覺え給へば、忍びて諸共にもやと、
 思し寄る折あれど、さる心細からむ海面の、波風より外に立ち交る人も無からむに、斯くらうたき御様にて、
 引具し給へらむもいとつきなく、我が心にもなかく物思ひのつまなるべきをなど、思し返すを、女君は、
 「いみじからむ道にも、後れ聞えずだにあらば」とおもむけて、恨めしげに思いたり。かの花散里にも、お

- (一) 源は
- (二) ばつとした
- (三) 二條院の
- (四) 紫上

- (五) 下の帶の道のか
- たがた別るとも行
- きめぐりても逢は
- むとぞ思ふ(古今、
- 離別、友則)

- (六) 我が戀は行方も
- 知らず果もなし逢
- ふを限りと思ふば
- かりぞ(古今、戀
- 二、朝恒)

- (七) かりそめの行き
- かひ路とぞ思ひこ
- し今は限りの門出
- なりけり(古今、
- 哀傷、在原滋春)

- (八) 死出の旅
- (九) 口氣に出して

はし通ふ事こそ稀なれ、心細く哀れなる御有様を、この御蔭に隠れて物し給へば、いみじう歎き思したる様、いと理なり。等閑にても、仄かに見奉り通ひ給ひし所々、人知れぬ心を碎き給ふ人多かりける。三月二十日餘の程になむ、都離れ給ひける。人に、今としも知らせ給はず、唯いと近う仕う奉り馴れたる限り、七八人ばかり御供にて、いと微にて出で立ち給ふ。さるべき所々に、御文ばかり、態とならず打忍び給ひしにも、哀れと忍ばるばかり書き盡くし給へるは、見所もありぬべかりしかど、その折の心地の紛れに、はかばかしくも聞き置かずなりにけり。

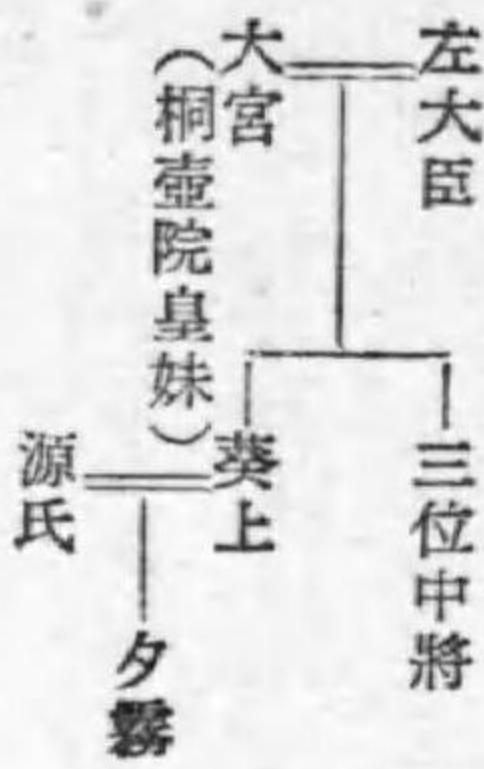
二三日豫て、大殿に、夜に隠れて渡り給へり。網代車の打寢れたるにて、女車のやうにて隠るへ入り給ふもいと哀れに、夢とのみ覺ゆ。御方いと寂しげに、荒れたる心地して、若君の御乳母ども、昔侍ひし人の中に、罷出散らぬ限り、斯く渡り給へるを珍らしがり聞えて、参う上り集ひて、見奉るにつけても、殊に物深からぬ若き人々さへ、世の常なさ思ひ知られて、涙に昏れたり。若君はいと美しうて、戯れ走りおはしたり。

源「久しき程に忘れぬこそ哀れなれ」とて、膝に居る給へる御氣色、忍び難げなり。大臣此方に渡り給ひて、對面し給へり。左大臣「つれづれに籠らせ給へらむ程、何と侍らぬ昔物語も、参り来て聞えさせむと思ひ給ふれど、身の病重きにより、公にも仕う奉らず、位をも返し奉りて侍るに、私様には腰伸べてなど、物の聞え僻々しかるべきを、今は世の中憚るべき身にも侍らねど、逸速き世のいと怖ろしう侍るなり。斯かる御事を見給ふるにつけて、命長きは心憂く思ひ給へらるゝ世の末にも侍るかな。天の下を逆様になしても、思ひ給へ寄らざりし御有様を見給ふれば、萬づいと味氣なくなむ」と聞え給ひて、いたう潮垂れ給ふ。源と

(一) 一説、世に

(二) 故葵上の室

(三) 夕霧



ある事も斯かる事も、前の世の報にこそ侍るなれば、言ひもて行けば、唯自らの怠りになむ侍る。さして斯く官爵を取られず、淺薄なる事にかゝらひてだに、公の長まりなる人の、現様にて世の中にあり經るは、咎重き業に、他の國にもし侍るなるを、遠く放ち遣はすべき定めなども侍るなるは、様異なる罪に當るべきにこそ侍るなれ。濁りなき心に任せて、強顔く過し侍らむもいと憚り多く、これより大きな恥に臨まぬ前に、世を遁れなむと思ふ給へ立ちぬる」など、細やかに聞え給ふ。昔の御物語、院の御事、思し宜はせし御心ばへなど聞え出で給ひて、御直衣の袖もえ引放ち給はぬに、君もえ心強くもてなし給はず。若君の何心なく紛れ歩いて、これかれに馴れ聞え給ふを、いみじと思したり。左過ぎ侍りにし人を、世に思ふ給へ忘るゝ世無くのみ、今に悲しび侍るを、この御事になむ、若し侍る世ならましかば、如何やうに思ひ歎き侍らまし、よくぞ短くて、斯かる夢を見ずなりにけると、思ふ給へ慰め侍る。幼く物し給ふが、斯く齡過ぎぬる中に、留まり給ひて、なづさひ聞えぬ月日や隔たり給はむと、思ひ給ふるをなむ、萬づの事よりも悲しう侍る。古の人も、眞に犯あるにてしも、斯かる事に當らざりけり。猶さるべきにて、人の朝廷にも、斯かる類多く侍りけり。されど、言ひ出づる節ありてこそさる事も侍りけれ。とさまかうさまに、思ひ給へ寄らむ方なくなむ」など、多くの御物語聞え給ふ。

三位中將も参り會ひ給ひて、御酒など参り給ふに、夜更けぬれば、泊り給ひて、人々御前に侍はせ給ひて、

(一) 異朝
(二) 桐壺院

(三) 葵上
(四) 此度の御退去の事

(五) 夕霧
(六) 宿命で

(七) 前の頭中將

物語などせさせ給ふ。人よりは勝にこよなう忍び思す中納言の君、いへばえに悲しう思へる様を、人知れず哀れと思す。人皆静まりぬるに、取り分きて語らひ給ふ。これにより留まり給へるなるべし。明けぬれば、夜深う出で給ふに、有明の月いとをかしう、花の木どもやうく盛り過ぎて、僅なる木陰のいと面白き庭に薄く霧り渡りたる、そこはかとなく霞み合ひて、秋の夜の哀れに多く立勝れり。隅の間の勾欄に押懸かりて、とばかり眺め給ふ。中納言の君見奉り送らむとにや、妻戸押し開けて居たり。源また對面あらむ事こそ、思へばいと難けれ。斯かりける世を知らで、心安くもありぬべかりし月頭を、さしも急がで隔てけるよ」など宣へば、物も聞えず泣く。若君の御乳母の宰相の君して、宮の御前より御消息聞え給へり。

大宮 自らも聞えまほしきを、かき昏す亂り心地躊躇ひ侍る程に、いと夜深う出でさせ給ふなるも、さま變りたる心地のみし侍るかな。心苦しき人のいぎたなき程は、暫しも休らはせ給はで。

源 鳥邊山燃えし煙も紛ふやと螢の鹽焼く浦見にぞ行く

御返しともなく打誦じ給ひて、源の別れは、斯うのみやは心盡くしなる、思ひ知り給へる人もあらむかし」と宣へば、宰相「いつとなく、別れといふ文字こそうたて侍るなる中にも、今朝はなほ類あるまじう思ひ給へらるゝ程かな」と、鼻聲にて、げに淺からず思へり。

源 聞えさせまほしき事も、返すく思ふ給へながら、たゞ結ばほれ侍るほど推量らせ給へ。いぎたなき

- (一) 葵上の侍女 (二) 葵在世の頃と (三) 言はうとして言へず。言へばえに言はねば胸の騒がれて心一つに歎く頃かな (伊勢物語)

人は、見給へむにつけても、なか／＼、憂き世遁れ難う思ひ給へられぬべければ、心強く思う給へなして急ぎ罷出侍り。

と聞え給ふ。出で給ふ程を、人々覗きて見奉る。入方の月いと明きに、いと艶かしく清らにて、物を思いたる様、虎狼だにも泣きぬべし。まして幼稚くおはせし程より見奉り初めてし人々なれば、噓しへなき御有様をいみじと思ふ。眞やかな御返し、

大宮 亡き人の別れやいと隔たらむ煙となりし雲居ならでは

取り添へて哀れのみ盡きせず、出で給ひぬる名残、忌々しきまで泣き合へり。

殿におはしたれば、我が御方の人々も、まどろまさりける氣色にて、處々に羣れ居て、淺ましとのみ世を思へる氣色なり。侍ひには、親しう仕う奉る限りは、御供に参るべき心設けして、私の別れ惜しむ程にや、人目も無し。さらぬ人は訪らひ参るも重き咎めあり、煩はしき事増れば、所狭く集ひし馬車の形もなく寂しきに、世は憂きものなりけりと思し知らる。臺盤なども一半は塵ばみて、疊所々引き返したり。見る程だに斯かり、まして如何に荒れ行かむと思す。西の對に渡り給へれば、御格子も参らで眺め明し給ひければ、簀子などに、若き童べ、所々に臥して、今ぞ起き騒ぐ。宿直姿どもをかしようて出で入るを見給ふにも心細う、年月経ば、斯かる人々も、えしも在り果てでや行き散らむなど、さしもあるまじき事さへ、御目のみ留まりけり。昨夜は云々して夜更けにしかばなむ。例の思はずなるさまにや思しなしつる。斯くて侍る程だに御目離れずと思ふを、斯く世を離るゝ際には、心苦しき事の自ら多かりけるを、直屋隠にてやは。常なき世

(一) 二條院

(二) 侍所

(三) 紫上の方

に、人にも情なきものと、心置かれ果てむも、いとほしうてなむ」と聞え給へば、斯かる世を見るより外に、思はずなる事は、何事にか」とばかり宣ひて、いみじと思し入りたる様、人より殊なるを、ことわりぞかし、父親王はいと疎かにて、もとより思し付きにけるに、まして世の聞えを煩はしがりて、音づれ聞え給はず。御訪らひにだに渡り給はぬを、人の見るらむ事も恥かしく、なか／＼知られ奉らで止みなましを、繼母の北の方などの、「世に俄なりし幸ひの慌しさ。あなゆゝしや。思ふ人々、方々につけて別れ給ふ人かな」と宣ひけるを、さる便りありて漏り聞き給ふにも、いみじう心憂ければ、これよりも絶えて音づれ聞え給はず。又頼もしき人もなく、實にぞ哀れる御有様なる。眞なほ世に免され難うて年月を経ば、巖の中にも迎へ奉らむ。只今は人聞きのいとつき無かるべきなり。公に畏まり聞ゆる人は、明らかなる月日の影をだに見ず、安らかに身を振舞ふ事も、いと罪重かり。過ちなけれど、さるべきにこそ、斯かる事もあめれと思ふに、まして思ふ人具するは、例なき事なるを、直趣に物狂ほしき世にて、立ち勝る事もありなむ」など聞え知らせ給ふ。日関くるまで大殿籠れり。帥宮・三位中將などおはしたり。對面し給はむとて、御直衣など奉る。眞位なき人は」とて、無紋の御直衣、なか／＼いと懐かしきを著給ひて打簀れ給へる、いとめでたし。御髪搔き給ふとて、鏡臺に寄り給へるに、面瘦せ給へる影の、我ながらいと貴に清らなれば、眞こよなうこそ衰へにけれ。この影の様にや瘦せて侍る。哀れなるわざかな」と宣へば、女君、涙を一目浮けて見おこせ給へる、いと忍び難し。

朱雀院

源氏

帥宮
(發兵部卿宮)

(一) 兵部卿宮

(二) 榮は源に

(三) 父宮は

(四) 父宮に

(五) これ以上の恥

(六) 頭中

源身は斯くてさすらへぬとも君が邊去らぬ鏡の影は離れじと聞え給へば、

業別れても影だに留まるものならば鏡を見ても慰めてまし

言ふとも無くて、柱隠れに居隠れて、涙を紛らはし給へる様、なほ許多見る中に類なかりけりと、思し知らるゝ人の御有様なり。親王は、哀れなる御物語聞え給ひて、暮るゝ程に還り給ひぬ。

花散里の心細げに思して、常に聞え給ふも理にて、かの人も今一度見ずば辛しと思はむと思せば、その夜はまた出で給ふものから、いと物憂くて、いたう更しておはしたれば、女御「斯く數まへ給ひて、立ち寄せ給へる事」と、喜び聞え給ふ様、書き續けむもうるさじ。いとみじう心細き御有様、唯この御蔭に隠れて過い給へる年月、いとゞ荒れ増らむ程思し遣られて、殿の内いと幽なり。月朧にさし出でて、池廣く山木深き邊、心細げに見ゆるにも、住み離れたらむ巖の中思し遣らる。西面には、かうしも渡り給はずやと、打屈して思しけるに、哀れ添へたる月影の、艶かしうしめやかなるに、打振舞ひ給へる匂ひ、似るもの無くて、いと忍びやかに入り給へば、少し膝行り出でて、やがて月を見ておはす。又此處に御物語の程に、明方近うなりにけり。眞短の夜の程や、かばかりの對面も又はえしもやと思ふこそ、事無しにて過しつる年頃も悔しう、來し方行く先の例になりぬべき身にて、何となく心のどまる世無くこそありけれ」と、過ぎにし方の事ども宣ひて、鶏も屢々鳴けば、世に愼みて急ぎ出で給ふ。例の月の入り果つる程、よそへられて哀れなり。女君の濃き御衣に映りて、實に「濡るゝ顔」なれば、

(一) 帥宮

(二) 麗景殿

(三) 花散里上

(四) 逢ひにあひて物思ふ頃の我が袖に宿る月さへ濡るゝ顔なる(古今、戀五、伊勢)

女月影の宿れる袖は狭くとも留めても見ばや飽かぬ光を
いみじと思いたるが、心苦しければ、且は慰め聞え給ふ。

源「行き廻り終にすむべき月影のしばし曇らむ空な眺めそ

思へば果敢なしや。唯、知らぬ涙のみこそ、心をくらすものなれ」など宣ひて、明けぐれの程に出で給ひぬ。
萬づの事どもしたゝめさせ給ふ。親しう仕う奉り、世に靡かぬ限りの人々、殿の事取行ふべき上下定め置か
せ給ふ。御供に隨ひ聞ゆる限りは、又擇り出で給へり。かの山里の御住處の具は、えさらす取り使ひ給ふべ
き物ども、殊更に装ひも無く事削ぎて、又さるべき書ども、文集など入りたる箱、さては琴一つぞ持たせ給
ふ。所狭き御調度、花やかなる御装ひなど、更に具し給はず。あやしの山賤めきてもてなし給ふ。侍ふ人々
より初め、萬づの事、皆西の對に聞え渡し給ふ。領じ給ふ御莊・御牧より初めて、さるべき所々の券など、
皆奉り置き給ふ。それより外の御倉町、納殿などいふ事まで、少納言をはかしくしきものに見置き給へれ
ば、親しき家司ども具して、しろしめすべきさまども宣ひ預く。わが御方の中務・中將などやうの人々、強
顔き御もてなしながら、見奉る程こそ慰めつれ、何事につけてかと思へども、運命ありてこの世に又歸る
やうもあらむを、待ちつけむと思はむ人は、此方に侍へ」と宣ひて、上下皆參り上らせ給ひて、然るべき物
ども、品々配らせ給ふ。若君の御乳母達、花散里などにも、をかしき様のはさるものにて、まめくしき筋
に思し寄らぬ事なし。尙侍の御許に、わり無くして聞え給ふ。

(一) 行く先を知らぬ涙の悲しきはたゞ目の前に落つるなりけり(後撰、離別編旅、源濟)

(二) 紫上乳母

(三) 源の侍女

(四) 紫上の方

(五) 朧月夜

源訪はせ給はぬも、理に思ひ給へながら、今はと世を思ふ給へ果つる程の憂さも辛さも、類なき事にて
そ侍りけれ。

逢瀬なき涙の河に沈みしや流るゝ水脈の初めなりけむ
と思ひ給へ出づるのみなむ、罪遁れ難う侍りける。

道の程も危ければ、細かには聞え給はず。女といみじう覺え給ひて、忍び給へど、御袖より餘るも所狭く
なむ。

涙河浮ぶ水泡も消えぬべし流れて後の瀬をも待たずて

泣くく亂れ書き給へる御手いとをかしげなり。今一度對面なくてやと思すは猶口惜しけれど、思し返して、
憂しと思しなす縁多くて、臆氣ならず忍び給へば、いと強ちにも聞え給はずなりぬ。

明日とての暮には、院の御墓拜み奉り給ふとて、北山へ詣で給ふ。御供に唯五六人ばかり、下人も睦まじき
限りして、御馬にてぞおはする。更なる事なれど、ありし世の御歩きに異なり。皆いと悲しう思ふ中に、か
の御褻の日、假の御隨身にて仕う奉りし、右近の將監の藏人、得べき爵位も程過ぎつるを、終に御簡削られ
て、官も取られてはしたなければ、御供に參る中なり。賀茂の下の御社を、かれと見渡す程、ふと思ひ出で
られて、下りて御馬の口を取る。

(一)(二) いづれも、身
に掛く

(三) 太政大臣(前右
等

(四) 女も
大臣・弘徽殿太后

(五) 葵卷、一五八頁参照
(六) 伊豫介の子、紀伊守
の弟

(七) 從五位下の敘爵
(八) 昇殿を停められて殿
上の日給簡を除かれる

右近「引連れて葵かさししそのかみを思へば辛し賀茂の瑞垣

と言ふを、實に如何思ふらむ、人より勝に花やかなりしものをと思すも心苦し。君も、御馬より下り給ひて、御社の方を拜み給ふとて、神に罷り申し給ふ。

源 憂き世をば今ぞ別るゝ留まらむ名をば糺の神に任せて

と宣ふ様、物愛でする若き人にて、身に泌みて哀れにめでたしと見奉る。

御山に参うで給ひて、おはしましし御有様、唯目の前のやうに思し出でらる。限り無きにても、世になくなりぬる人ぞ、言はむ方なく口惜しき業なりける。萬づの事を泣くく申し給ひても、その理を現はに承り給はねば、さばかり思し宣はせしさまくの御遺言は、何方か消え失せにけむと、言ふ甲斐なし。御墓は道の草繁くなりて、分け入り給ふ程いと露けきに、月も雲隠れて、森の木立木深く心凄し。歸り出でむ方もなき心地して、拜み給ふに、在りし御面影さやかに見え給へる、漫寒き程なり。

源 亡き影やいかど見るらむ比へつゝ眺むる月も雲隠れぬる

明け果つる程に歸り給ひて、春宮にも御消息聞え給ふ。王命婦を御代りとして侍はせ給へば、その局にとて、

源 今日なむ都離れ侍る。又参らずなりぬるなむ、數多の憂へに勝りて思う給へられ侍る。萬づ推量りて啓し給へ。

いつかまた春の都の花を見む時失へる山賤にして

櫻の散り過ぎたる枝に付け給へり。斯くなむと御覽せさすれば、幼き御心地にも、眞實だちておはします。

(一) 下賀茂の社は糺の森に在る

(二) 桐壺院御陵

(三) 藤壺御出家後は

命「御返し如何物し侍らむ」と啓すれば、春「暫し見ぬだに戀しきものを、遠くはまして如何にと、言へかし」と宣はす。物果敢なの御返りやと、哀れに見奉る。

命 更に聞えさせ遣り侍らず。御前には啓し侍りぬ。心細げに思召したる御氣色もいみじう。

など、そこはかとなく。心の亂れけるなるべし。

命 咲きて疾く散るは憂けれど行く春は花の都を立ち歸り見よ

時しあらば。

と聞えて、名残も哀れなる物語をしつゝ、一宮の内忍びて泣き合へり。一目も見奉れる人は、斯く思しくづほれぬる御有様を、歎き惜しみ聞えぬ人なし。まして常に参り馴れたりしは、知り及び給ふまじき長女・御厠人までも、有り難き御願みの下なりつるを、暫しにても、見奉らぬ程や經むと思ひ歎きたり。大方の世の人も、誰かは宜しく思ひ聞えむ。七つになり給ひしより以來、帝の御前に夜晝侍ひ給ひて、奏し給ふ事の成らぬは無かりしかば、この御勞りにかゝらぬ人なく、御徳を喜ばぬやは有りし。やんごとなき上達部・辨官などの中にも多かり。それより下は數知らぬを、思ひ知らぬには有らねど、差當りては、逸速き世を思ひ憚りて、参り寄る人もなし。世ゆすりて惜しみ聞え、下には公を譏り恨み奉れど、身を捨てて訪らひ参らむにも何の甲斐かと思ふにや、斯かる折は人わろく、恨めしき人多く、世の中は味氣なきものかなとのみ、萬づにつけて思す。

その日は女君に、御物語長閑に聞え暮し給ひて、例の夜深く出で給ふ。狩の御衣など、旅の御装ひいたく婁

(一) 雑用の下女

(二) 太政官の書記官

し給ひて、源月出でにけりな。なほ少し出でて見だに送り給へかし。如何に聞ゆべき事多く積りにけりとのみ覚えむとすらむ。一日二日邂逅たまたまに隔つる折だに、怪しういぶせき心地するものを」とて、御簾捲き上げて、端の方に誘いざなひ聞え給へば、女君泣き沈み給へる、躊躇ためらひて膝行ひざり出で給へる、月影に、いみじうをかしげにて居給へり。我が身斯くて果敢なき世を別れなば、如何なる様にさすらへ給はむと、後うしろめたく悲しけれど、思し入りたるがいとどしかるべければ、

源「生ける世の別れを知らず契りつゝ命を人に限りけるかな
果敢なし」など、淺はかに聞えなし給へば、

紫惜しからぬ命に代へて目の前の別れを暫し止めてしがな

實にさぞ思おぼさるらむと、いと見捨て難けれど、明け果てなばはしたなかるべきにより、急ぎ出で給ひぬ。道すがら面影につと添ひて、胸も塞ふさがりながら、御船に乗り給ひぬ。日長き頃なれば、追風さへ添ひて、まだ申の時ばかりに、かの浦に著き給ひぬ。假初の道にても、斯かる旅を慣らひ給はぬ心地に、心細さもをかしさも珍めづらかなり。大江殿おほやまとと言ひける所は、いたく荒れて、松ばかりぞ標しるしなりける。

源唐國たうこくに名を残しける人よりも行方知らぬ家居いへをやせむ

渚しづに寄る浪のかつ返るを見給ひて、「羨うらやましくも」と打誦うたじ給へる、さる世の古言ふることなれども、珍らしく聞きな

(一) 午後四時過

(二) 齋宮歸洛の時の

旅館・渡邊の大江

に在つた

(三) 楚の屈原懷王に

放逐され、遂に泪

羅に投じて死んだ

故事(史記、屈原

買生列傳・楚辭の

離騷經第一・漁父

第七)

(四) いとどしく過ぎ

行く方の戀しきに

羨ましくもかへる

浪かな(伊勢物語)

され、悲しとのみ御供の人々思へり。打顧み給へるに、來し方の山は霞遙かにて、眞まことに三千里さんせんりの外の心地するに、權ごんの罫かも塔たへ難し。

源故郷を峯の霞は隔つれど眺むる空は同じ雲居か
辛つらからぬもの無くなむ。

おはすべき所は、行平の中納言の、藻鹽垂れつゝ忙いそびける家居近き邊わたりなりけり。海面は稍入りて、哀れに心すごげなる山中なり。垣の様より初めて珍めづらかに見給ふ。茅屋かやども、葦葺あしづける廊りやうめく屋など、をかしうしつらひなしたり。所に付けたる御住居、やう變りて、斯かる折ならずば、をかしうもありなましと、昔の御心のすさび思し出づ。近き處々の御莊みやうの司召つかさして、然るべき事どもなど、良清の朝臣など、親しき家司けいしにて、仰せ行ふも哀れなり。時の間に、いと見所ありてしなさせ給ふ。水深う遣りなし、植木どもなどして、今はと鎮まり給ふ心地、現ならず。國の守も親しき殿人とのびとなれば、忍びて心寄せ仕つかう奉る。斯かる旅所たびどころとも無く、人騒がしけれども、はかくしく物をも宜よろひ合はすべき人し無ければ、知らぬ國の心地して、いと埋れいたく、いかで年月を過すさましと思し遣らる。

やう／＼專鎮せんちんまり行くに、長雨ながあめの頃になりて、京の事ども思し遣らるゝに、戀しき人多く、女君おんなの思したりしさま、若君わがの何心もなく紛れ給ひしなどを初め、此處こゝ彼處あつち思ひ遣り聞え給ふ。京へ人出し立て給ふ。

(一) 十一月中長至夜

三千里外遠行人

若爲わが獨宿ひとり楊梅館やうばい

冷枕單床一病身

(白氏文集、冬至

宿やど楊梅館)

(三) 我が上に露ぞ

おくなる天の川

とわたる舟の權の

事か(伊勢物語・

古今、雜上)

(三) わくらはに問ふ

人あらば須磨の浦

に藻鹽垂れつゝ忙

ぶと答へよ(古今、

雜下、行平)

(四) 播磨守の子。源

の臣

(五) 攝津守

(六) 紫上 (七) 夕霧

尙侍の御許に、例の中納言の君の私事のやうにて、中なるに、

源つれごとと、過ぎにし方の思う給へ出でらるゝにつけても、

懲りずまの浦の海松布もゆかしきを鹽焼く蟹や如何思はむ

様々書き盡くし給ふ言の葉、思ひ遣るべし。大殿にも、宰相の乳母にも、仕う奉るべき事なども書き遣はず。京には、この御文、所々に見給ひつゝ、御心亂れ給ふ人々のみ多かり。二條院の君は、その儘に起きも上り給はず、盡きせぬさまに思し焦るれば、侍人々もこしらへ侘びつゝ、心細う思ひ合へり。持て馴らし給ひし御調度ども、彈き馴らし給ひし御琴、脱ぎ捨て給へる御衣の匂ひなどにつけても、今はと世に亡くなりたらむ人のやうにのみ思したれば、且は忌々しうて、少納言は、僧都に御祈禱の事など聞ゆ。二方に御修法などせさせ給ふ。且は斯く思し歎く御心を静め給ひて、思ひなき世にあらせ奉り給へと、心苦しき儘に祈り申し給ふ。旅の御宿直物など、調じて奉り給ふ。練の御直衣・指貫、さま變りたる心地するもいみじきに、「さらぬ鏡」と宣ひし御面影の、實に身に添ひ給へるも甲斐なし。出で入り給ひし方、寄り居給ひし眞木柱などを見給ふにも、胸のみ塞がりて、物をとかう思ひ廻らし、世に潮染みぬる齡の人だにあり、まして馴れ睦び聞え、父母にもなりて扱ひ聞え、おほし立て慣らはし給へれば、俄に引き別れて、戀しう思ひ聞え給へる。理なり。ひたすら世に亡くなりなむは、言はむ方なくて、言ふ甲斐なきにても、やうく忘草も生ひやすらむ。聞く程は近けれど、いつまでと限りある御別れにもあらぬを思すに、盡きせずなむ。尙侍の君の御返りには、

(一) 臘月夜

(二) 同封した文に

(三) 二つの意味で
(四) 身はかくてさす

らへぬとも君があ
たりさらぬ鏡の影

は離れじ(源の歌、
二二七頁)

(五) 世に馴れた

浦に焚くあまたに包む戀なればくゆる煙よ行く方ぞ無き
更なる事どもはえなむ。

とばかり、聊かにて、中納言の君の中にあり。思し歎くさまなど、いみじく言ひたり。哀れと思ひ聞え給ふ節々あれば、打泣かれ給ひぬ。姫君の御文は、心殊に細やかなりし御返りなれば、哀れなる事多くて、業浦人の潮汲む袖に比べ見よ波路隔つる夜の衣を

物の色し給へるさまなど、いと清らなり。何事もらうくじうものし給ふを、思ふさまにて、今は殊に心慌しう行きかゝづらふ方も無く、しめやかにて在るべきものと思すに、いみじう口惜しう、夜晝面影に覺えて、堪へ難く思ひで出られ給へば、なほ忍びてや迎へましと思す。又打返し、なぞや、斯く憂き世に罪をだに失はむと思せば、やがて御精進にて、明暮行ひておはす。大殿の若君の御事などあるにも、いと悲しけれど、自ら逢ひ見てむ、頼もしき人々物し給へば、後めたうはあらずと思しなざるゝは、なかゝこの道の惑はれ給はぬにやあらむ。

眞や、騒がしかりし程の紛れに漏らしてけり。かの伊勢の宮へも御使ありけり。彼よりもふりはへ尋ね参れり。浅からぬ事ども書き給へり。言の葉、筆遣ひなどは、人より殊に艶かしう、至り深く見えたり。

思なほ現とは思ひ給へられぬ御住居を承るも、明けぬ夜の心惑ひかとなむ。さりととも年月は隔て給はじ

(一) 數多と蟹に掛く
風をいたみくゆる
煙の立ち出でて猶

こりずまの浦ぞ戀
しき(後撰、戀四、
貫之)

(三) 言ふも更なる退
去に就ての俗しき
(三) 中納言の文中に

(四) 人の親の心は闇
にあらねども子を
思ふ道に惑ひぬる

かな(後撰、雜一、
兼輔)
(五) 六條御息所

と、思ひ遣り聞えさするにも、罪深き身のみこそ。又聞えさせむ事も遙かなるべければ、うきめ刈る伊勢をの海士を思ひ遣れ藻鹽垂るてふ須磨の浦にて萬づに思う給へ亂るゝ世の有様も、猶如何になり果つべきにか。と多かり。

思 伊勢島や潮干の瀉にあさりてもいふかひ無きは我が身なりけり

物を哀れと思しける儘に、打置き／＼書き給へる、白き唐紙四五枚ばかりを巻き續けて、墨つきなど見所あり。哀れに思ひ聞えし人を、一節憂しと思ひ聞えさせし心過りに、この御息所も思ひ倦んじて別れ給ひにしと思せば、今にいとほしう辱きものに思ひ聞え給ふ。折からの御文、いと哀れなれば、御使さへ睦まじうて、二三日居えさせ給ひて、彼處の物語などせさせて聞召す。若やかに、氣色ある侍の人なりけり。斯く哀れなる御住居なれば、斯様の人も自ら物遠からで、仄見奉る御様容貌を、いみじうめでたしと涙落しけり。御返り書き給ふ言の葉思ひ遣るべし。

斯く世を離るべき身と、思ひ給へらましかば、同じうは慕ひ聞えましものを、などなむ。つれづれに心細き儘に、

伊勢人の波の上漕ぐ小船にもうきめは刈らで乗らましものを

蟻が積むなげきの中に潮垂れていつまで須磨の浦と眺めむ

- (三) 生靈の事(葵巻参照)
- (三) 浮布と憂目に掛く
- (四) 鹽木に言ひ掛く
- (五) 住むに掛く
- (一) 伊勢人は、あやしきものをヤ、などてへば、小船に乗りてヤ、波のへを漕ぐヤ(風俗歌、伊勢人)

聞えさせむ事の、いづとも侍らぬこそ、盡きせぬ心地し侍れ。

などぞありける。斯様に、何處にも覺束なからず聞え交し給ふ。花散里も悲しと思しける儘に、書き集め給ひける御心々見給ふに、をかききも、目慣れぬ心地して、何れも打見給ひつゝ慰め給ひ、且は物思ひの催し種なめり。

花 荒れ増る軒のしのぶを眺めつゝ繁くも露のかゝる袖かな

とあるを、實に葎より外の後見もなきさまにておはすらむと思し遣りて、長雨に築土所々崩れてなど聞き給へば、京の家司の許に仰せ遣はして、近き國々の御莊の者など催させて、仕う奉るべき由宣はす。

尙侍の君は、人笑へにいみじう思しくづぼるゝを、大臣いと愛しうし給ふ君にて、切に宮にも申し、内裏にも奏し給ひければ、限りある女御・御息所にもおはせず、公様の宮仕と思しなせり。又かの憎かりし故こそ、厭しき事も出で來しか、赦され給ひて、参り給ふべきにつけても、なほ心に染みにし方のみぞ哀れに覺え給ひける。七月になりて参り給ふ。いみじかりし御思ひの名残なれば、例の上につと侍はせ給ひて、萬づに恨み、且はあはれに契らせ給ふ。御様容貌も、いと艶かしう清らなれど、思ひ出づる事のみ多かる心の中ぞ辱き。御遊びの序に、朱、その人の無きこそいとさう／＼しけれ。如何に、ましてさ思ふ人多からむ。何事にも光なき心地するかな」と宣はせて、朱、院の思し宣はせし御心を違へつるかな。罪得らむかし」とて涙ぐませ給ふに、え念じ給はず。朱、世の中こそ、在るにつけても味氣なきものなりけれと思ひ知る儘に、久し

- (一) 父右大臣
- (二) 御咎めもなく
- (三) 帝の寵愛
- (四) 帝(朱雀院)は
- (五) 帝は
- (六) 帝は
- (七) 臘の
- (八) 賢木巻、一九五頁参照
- (三) 弘徽殿皇太后
- (四) 帝(朱雀院)は
- (六) 帝は
- (七) 臘の
- (八) 賢木巻、一九五頁参照

く世に在らむものとなむ更に思はぬ。さもなりなむに、如何思さるべき。近き程の別れに、思ひ賤されむこそ妬けれ。生ける世には、實によからぬ人の言ひ置きけむ」と、いと懐かしき御様にて、物を眞に哀れと思し入りて宣はするにつけて、ほろ／＼と零れ出づれば、去さりや、何れに落つるにか」と宣はず。去今まで皇子達の無きこそさう／＼しけれ。春宮を院の宣はせしさまに思へど、善からぬ事ども出で来れば、心苦しう」など、世を御心の外に政ちなし給ふ人々の有るに、若き御心の強き所無き程にて、いとほしと思したる事も多かり。

須磨には、いと心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、「關吹き越ゆる」と言ひけむ浦波、夜々は實にいと近く聞えて、又無く哀れなるものは、斯かる所の秋なりけり。御前にいと人少なにて、打休み渡れるに、一人目を覺して、枕を欹てて四方の嵐を聞き給ふに、波唯此處もとに立ち來る心地して、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりになりけり。琴を少し掻鳴らし給へるが、我ながらいと凄う聞ゆれば、弾きさし給ひて、

戀ひ侘びて泣く音に紛ふ浦波は思ふ方より風や吹くらむ

と語ひ給へるに、人々驚きて、めでたう覺ゆるに、忍ばれで、あいなう起き居つゝ、鼻を忍びやかにかみ渡

- (一) 源の須磨退去
- (二) 戀ひ死なむ後は
何せむ生ける日の
爲こそ人は見まく
ほしけれ(拾遺、
- 戀一、大伴百世)
- (三) 木の間より漏り
る月の影見れば心
づくしの秋は來に
- (四) 旅人は秋涼しく
なりにけり關吹き
越ゆる須磨の浦風
- (五) ひとりねの床に
たまれる涙には石
の枕も浮きぬべら
なり
- (六) 浪立たば沖の玉
藻も寄り來べく思
ふ方より風は吹か
なむ(玉葉、雜二、
朝恒)
- (續古今、羈旅、行平)
- (古今六帖、五)

す。實に如何に思ふらむ。我が身ひとつにより、親兄弟片時立ち離れ難く、程につけつゝ思ふらむ家を別れて、斯く惑ひ合へると思すに、いみじくて、いと斯く思ひ沈む様を、心細しと思ふらむと思せば、晝は何くれと戯言打宣ひ紛らはし、つれ／＼なる儘に、いろ／＼の紙を繼ぎつゝ手習をし給ひ、珍らしきさまなる唐の綾などに、様々の繪どもを、晝きすさび給へる、屏風の面どもなど、いとめでたく見所あり。人々の語り聞えし海山の有様を、遙かに思し遣りしを、御目に近くては、實に及ばぬ磯のたゝすまひ、二なく晝き集め給へり。此の頃の上手にすめる干枝・常則などを召して、作繪仕う奉らせばやと、心許ながり合へり。懐かしうめでたき御有様に、世の物思ひ忘れて、近う馴れ仕う奉るを嬉しき事にて、四五人ばかりぞつと侍ひける。前裁の花いろ／＼咲き亂れ、面白き夕暮に、海見やらるゝ廊に出で給ひて、佇み給ふ御様の、ゆゝしう清らなるに、所柄はましてこの世の物とも見え給はず。白き綾のなよ／＼かなる、紫苑色など奉りて、濃かなる御直衣、帯しどけ無く打亂れ給へる御様にて、釋迦牟尼佛弟子」と名告りて、緩かに讀み給へる、また世に知らず聞ゆ。沖より舟どもの語ひの、しりて漕ぎ行くなども聞ゆ。仄かに、たゞ小さき鳥の浮べると見やらるゝも、心細げなるに、雁の連ねて鳴く聲楫の音に紛へるを、打眺め給ひて、御涙の零るゝを搔拂ひ給へる御手つき、黒木の御數珠に映え給へるは、故郷の女戀しき人々の心地、皆慰みにけり。

初雁は戀しき人の列なれや旅の空飛ぶ聲の悲しき
と宣へば、良清、

かきつらね昔の事ぞ思ほゆる雁はその世の友ならねども

(一) 若紫卷、七十二頁參照

(二) 墨がきの晝に彩色を施すこと

民部大輔

心から常世を捨てて鳴く雁を雲の餘所にも思ひけるかな
前の右近將監

「常世出でて旅の空なる雁がねも列に後れぬ程ぞ慰む

友惑はしては如何に侍らまし」と言ふ。親の常陸になりて下りしにも誘はれで、参れるなりけり。下には思ひ碎くべかめれど、誇りかにもてなして、強顔きさまにし歩く。

月のいと花やかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりと思し出でて、殿上の御遊び戀しく、所々眺め給ふらむかしと、思ひ遣り給ふにつけても、月の顔のみまもられ給ふ。「二千里外古人心」と誦し給へる、例の涙も止められず。「夜更け侍りぬ」と聞ゆれど、なほ入り給はず。

「見る程ぞ暫し慰むめぐり逢はむ月の都は遙かなれども

上のいと懐かしう昔物語などし給ひし御様の、院に似奉り給へりしも、戀しく思ひ出で聞え給ひて、「恩賜の御衣は今こゝにあり」と誦しつゝ入り給ひぬ。御衣は眞に身放たず、傍らに置き給へり。

「憂しとのみ偏に物は思ほえて左右にも濡るゝ袖かな

その頃大貳は上りける。厳しう類廣く、女がちにて所狭かりければ、北の方は船にて上る。浦傳ひに逍遙し

(一) 惟光
(二) 伊紀守の弟、父は常陸介(前伊豫介)。二二九頁参照

(三) 三五夜中新月色
二千里外古人心
(原)白氏文集、八月十五日夜禁中獨直對月憶元九

(四) 兄帝朱雀院
(五) 桐壺院

賜、恩賜御衣今在此、捧持毎日拜、餘香(菅家後集、九月十日)

(六) 去年今夜侍清涼、秋思詩篇獨斷



つゝ來るに、外より面白き邊なれば心留まるに、大將斯くておはすと聞けば、あいなる好いたる若き女達は、船の内さへ恥かしう、心化粧せらる。まして五節の君は、綱手引き過ぐるも口惜しきに、琴の聲風につきて遙かに聞ゆるに、所のさま、人の御程、物の音の心細さ取り集め、心ある限り皆泣きにけり。帥御消息聞えたり。

大貳いと遙かなる程より罷り上りては、先づいつしかと侍ひて、都の御物語もとこそ思ひ給へ侍りつれ。思ひの外に、斯くておはしましける御宿りを罷り過ぎ侍る、辱く悲しうも侍るかな。相知りて侍る人、さるべきこれかれまで來向ひて數多侍れば、所狭きを思ひ給へ憚り侍る事ども侍りて、え侍はぬこと。殊更に参り侍らむ。

など聞えたり。子の筑前守ぞ参れる。この殿の、藏人になし顧み給ひし人なれば、いと悲し、いみじと思へども、又見る人々のあれば、聞えを思ひて、暫しもえ立ち留まらず。都離れて後、昔親しかりし人々、相見る事難うのみなりにたるに、斯く態と立ち寄り物したる事」と宣ふ。御返りもさやうになむ。守泣く泣く歸りて、おはする御有様語るに、帥より始め、迎への人々、まが／＼しう泣き満ちたり。五節はとかくして聞えたり。

五琴の音に引きとめらるゝ綱手繩たゆたふ心君知るらめやすき／＼しさも、人な咎めそ。

(一) 花散里卷、二一六頁参照 (二) 大貳をさす。帥缺員の際代理する故 (三) いで我を人な咎めそ大船のゆたのたゆたに物思ふ頃ぞ(古今、戀一)

と聞えたり。微笑みて見給ふ、いと恥かしげなり。

源 心ありて引手の綱のたゆたはば打過ぎましや須磨の浦波
漁せむとは思はざりしはや。

とあり。驛の長に句詩取らす人もありけるを、まして落ち留まりぬべくなむ覺えける。

都には、月日過ぐる儘に、帝を初め奉りて、戀ひ聞ゆる折節多かり。御兄弟の親王達、睦まじう聞え給ひし上達部など、初めつ方は訪らひ聞え給ふなどありき。哀れなる文を作り交し、それにつけても世の中のみ愛でられ給へば、後の宮開召して、いみじく宜ひけり。弘徽殿公の勘事なる人は、心に任せて、此の世の味ひをだに知る事難うこそあなれ。面白き家居して、世の中を誹りもどきて、かの鹿を馬と言ひけむ人の、僻めるやうに追従する」など、悪しき事ども聞えければ、煩はしとて、絶えて消息聞え給ふ人なし。二條院の姫君は、程經る儘に思し慰む折なし。東の對に侍ひし人々も、皆渡り参りし初めは、などかさしもあらむと思ひしかど、見奉り馴るゝ儘に、懐かしうをかき御有様、眞實なる御心ばへも、思ひ遣り深う哀れなれば、罷出散るもなし。なべてならぬ際の人々には、仄見えなどし給ふ。許多の中に勝れたる御志も、理なりけりと見奉る。

かの須磨には、久しうなるまゝに、え念じ過すまじう覺え給へど、我が身だに淺ましき宿世と覺ゆる住居に、

(一) 思ひきや部の別
れに衰へて鬚の繩
たぎいさりせむと
は(古今、雜下、篋)

(二) 昔原道眞配流の
途、「驛長勿レ驚時
變改、一策一落是
春秋」の句を明石

(三) 源長に取らせた
故事(大鏡上、左
大臣時平の條)

(四) 秦趙高が權勢を誇つて、
鹿を指して馬と言つた故事
(史記、秦始皇本紀)

(五) 源の侍女、中將・中務等

いかでかは打具しては、つき無からむ様を思ひ返し給ふ。所につけては萬づの事様變り、見給へ知らぬ下人の上をも、見給ひ慣らはぬ御心地に、めざましう忝う、自ら思さる。煙のいと近く時々立ち來るを、これや海士の鹽焼くならむと思し渡るは、おはします後の山に、柴と言ふ物ふすぶるなりけり。珍らかにて、
源 山賤の庵に焚けるしばくも言問ひ來なむ戀ふる里人

冬になりて雪降り荒れたる頃、空の氣色も殊に凄く眺め給ひて、琴を弾きすさび給ひて、良清に歌うたはせ、大輔横笛吹きて遊び給ふ。心とめて哀れなる手など弾き給へるに、異物の聲どもは止めて、涙を拭ひ合へり。昔胡の國に遣はしけむ女を思し遣りて、まして如何ばかりなりけむ、この世に我が思ひ聞ゆる人などをさ様に放ち遣りたらむ事、など思ふも、あらむ事のやうに忌々しくて「霜の後の夢」と誦じ給ふ。月いと明らさし入りて、果敢なき旅のおまし所は、奥まで限なし。床の上に夜深き空も見ゆ。入方の月凄く見ゆるに、
「唯これ西に行くなり」と、獨言ち給ひて、

源 何方の雲路に我も迷ひなむ月の見るらむ事も恥かし
と獨言ち給ひて、例のまどろまれぬ曉の空に、千鳥いと哀れに鳴く。

源 友千鳥諸聲に鳴く曉は獨り寢覺の床も頼もし

まだ起きたる人も無ければ、返すく獨言ちて臥し給へり。夜深く御手水参りて、御念誦などし給ふも、珍
(一) 胡國の王に嫁が 帝本紀)
された漢の王昭君 (三) 胡角一聲霜後夢 君、後江相公)
の故事(漢書、元 漢宮萬里月前腸 (三) 黃發桂芳半具、
圓、三千世界一周 遷(菅家後集、
天、天迦玄鑿雲將、 代月答)

らしき事のやうに、めでたくのみ覺えければ、え見奉り捨てず、家に假初にもえ出でざりけり。

明石の浦は唯這ひ渡る程なれば、良清の朝臣、かの入道の女を思ひ出でて、文など遣りけれど返り事もせず。父の入道ぞ、「聞ゆべき事なむ。假初に對面もがな」と言ひけれど、承引かざらむもの故、行き懸かりて、空しく歸らむ後手も痴なるべしと、屈しいたうて往かず。世に知らず心高う思へるに、國の内は、守の縁のみこそは、畏きことにすめれど、僻める心は更にさも思はで、年月を経けるに、この君斯くておはずと聞きて、母君に語らふやう、入桐壺の更衣の御腹の、源氏の光君こそ、公の御長まりにて、須磨の浦に物し給ふなれ。

中務官—〇—北方

大臣—明石入道

按察大納言—桐壺更衣—源氏

りて言ふも、頑しく見ゆ。眩きまでしつらひ傳きけり。母君「などで、めでたくとも、物の初めに、罪に當りて流されおはしたらむ人をしも思ひ懸けむ。さても心を留め給ふべくはこそあらめ、戯れにてもあるまじき事なり」と言ふを、いといたく眩く。今罪に當る事は、唐土にも我が朝にも、斯く世に勝れ、何事にも人に殊になりぬる人の、必ず有る事なり。いかに物し給ふ君ぞ。故母御息所は、己が叔父に物し給ひし按察

(一) 若紫卷、七二頁 参照

(二) 先方が 後姿

(三) 明石入道は 良清は播磨守の子

(四) 源氏の須磨退去をいふ 桐壺卷参照

大納言の御女なり。いと警策なる名を取りて、官仕に出し給へりしに、國王勝れて時めかし給ふ事雙び無かりける程に、人の嫉多くて亡せ給ひにしかど、この君の留まり給へる、いとめでたし。斯く、女は心を高く遣ふべきものなり。已斯かる田舎人なりとて、思し捨てしなど言ひ居たり。この女、勝れたる容貌ならねど、懐かしうあてはかに、心ばせある様などぞ、實にやんごとなき人に劣るまじかりける。身の有様を、口惜しきものに思ひ知りて、高き人は我を何の數にも思さじ、程に付けたる世をば更に見じ、命長くて、思ふ人々に後れなば、尼にもなりなむ、海の底にも入りなむ、などぞ思ひける。父君、所狭く思ひ傳せて、年に二度住吉に詣でさせけり。神の御驗をぞ、人知れず頼み思ひける。

須磨には、年返りて日長くつれくなるに、植ゑし若木の櫻仄かに咲き初めて、空の氣色麗かなるに、萬づの事思し出でられて、打泣き給ふ折々多かり。二月二十日餘、いにし年、京を別れし時、心苦しかりし人々の御有様などいと戀しく、南殿の櫻は盛りになりぬらむ。一年の花の宴に、院の御氣色、内裏の上のいと清らかに艶いて、我が作れる句を誦じ給ひしも、思ひ出で聞え給ふ。

源 ひとつとなく大官人の戀しきに櫻かさしし今日も來にけり

いとつれくなるに、大殿の三位中將は、今は宰相になりて、人柄のいと善ければ、時世のおぼえ重くて物し給へど、世の中いと哀れに味氣無く、物の折毎に戀しく覺え給へば、事の聞えありて、罪に當るとも如何

(一) 勝れた評判
(二) 花宴卷参照
(三) 兄弟朱雀院

(四) 百敷の大官人は いとまあれや櫻か
ざして今日も暮し

(五) 新古今、春下、 赤人

(六) 弘徽殿方に須磨を訪れた事が知れて

はせむと思しなりて、俄に參うで給ふ。打見るより、珍らしく嬉しきにも、一つ涙ぞ零れける。住ひ給へる様、言はむ方なく唐めきたり。所の様繪に畫きたらむやうなるに、竹編める垣し渡して、石の階、松の柱疎かなるものから、珍らかにをかし。山賤めきて、聽色の黄がちなるに、青鈍の狩衣・指貫打寒れて、殊更に田舎びてもてなし給へるしも、いみじう見るに笑まれて清らなり。取り遣ひ給へる調度も、假初にしなして、御座所も露に見入られる。碁・雙六の盤、調度、彈棊の具など、田舎わざにしなして、念珠の具、行ひ勤め給ひけりと見えたり。物參れるなど、殊更所につけ、興ありてしなしたり。海士ども漁りして、貝つ物持て參れるを、召し出でて御覽す。浦に年經るさまなど問はせ給ふに、さまく安げなき身の愁を申す。そこはかとなく嘯るも、心の行方は同じ事、何か異なると、哀れに見給ふ。御衣ども被けさせ給ふを、生ける甲斐ありと思へり。御馬ども近う立てて、見遣りなる倉か何ぞなる、稲ども取り出でて飼ふなど、珍らしう見給ふ。飛鳥井少し譚ひて、月頃の御物語、泣きみ笑ひみ、若君の何とも世を思さで物し給ふ悲しさを、大臣の明暮につけて思し歎く、など語り給ふに、堪へ難く思したり。盡きすべくもあらねば、なか／＼片端もえまねばす。終夜まどろまず、文作り明し給ふ。さ言ひながらも、物の聞えを慎みて急ぎ歸り給ふ。いとかなかなり。御土器參りて、「酔ひの悲しみの涙瀧ぐ春の盃のうち」と、諸聲に誦じ給ふ。御供の人ども皆涙を流す。己がじし、僅なる別れ惜しむべかめり。朝ぼらけの空に、雁連れて渡る。主人の君、

- (一) 源も宰相も共に (四) 向ふに見える (六) 酔悲瀧、涙春盃 年三月三十日別
- (二) 薄紅 (五) 飛鳥井に、あす 寒し、御秣もよし 裏、吟苦支、願鳴燭 微之於澗上、詩の
- (三) 碁石はじきの遊 (三) 碁石はじきの遊 (七) 催馬樂、飛鳥井) 前(白氏文集、十 句)

源 故郷を何れの春か行きて見む羨ましきは歸る雁がね
宰相更に立ち出でむ心地せで、

頭 飽かなくに雁の常世を立ち別れ花の都に道や惑はむ
さるべき都の土産など、由あるさまにてあり。主人の君、斯く忝き御送りにとて、黒駒奉り給ふ。頭、ゆゝしう思されぬべけれど、風に當りては、嘶えぬべければ」など申し給ふ。世に有り難げなる御馬の様なり。「形見に偲び給へ」とて、いみじき笛の名ありけるなどばかり、人咎めつべき事は、互にえし給はず。日やうやう差上りて、心慌しければ、願みのみしつゝ出で給ふを、見送り給ふ氣色いとなか／＼なり。頭、何時又對面給はらむとすらむ。さりとも斯くてやは」と申し給ふに、主人、

源 「雲近く飛び交ふ鶴も空に見よわれは春日の曇りなき身ぞ
且は頼まれながら、斯くなりぬる人は、昔の賢き人だに、はか／＼しう世に又交らふ事難く侍りければ、何か、都の境をまた見むとなむ思ひ侍らぬ」など宣ふ。宰相、

頭 「たづかななき雲居に獨り音をぞ鳴く翼ならべし友を戀ひつゝ、
忝く馴れ聞え侍りて、いとしもと悔しう思ひ給へらるゝ折多く」など、しめやかにあらで歸り給ひぬる名残、いと悲しう眺め暮し給ふ。

三月の朔日に出で來たる巳の日、「今日なむ、斯く思す事ある人は御諷し給ふべき」と、生賢しき人の聞ゆれ

- (一) 胡馬依北風、越鳥巢南枝 (文選、古詩の句) (三) たづきに同じ。田鶴に掛く
- (二) 思ふとていとこそ人に馴れざらめしか習ひてぞ見ねば戀しき (拾遺、戀四) (四) 三月上巳の節

ば、海面もゆかしくて出で給ふ。いと疎かに、軟障ばかりを引廻らして、この國に通ひける陰陽師召して、祓せさせ給ふ。船に事々しき人形載せて流すを見給ふにも、比へられて、

源 知らざりし大海の原に流れ来てひとかたにやは物は悲しき

とて居給へる様、さる晴れに出でて、言ふ由なく見え給ふ。海的面はうらくと風ぎ渡りて、行方も知らぬに、來し方行く先思し續けられて、

八百萬づ神も哀れと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ

と宣ふに、俄に風吹き出でて、空も搔昏れぬ。御祓もし果てず、立ち騒ぎたり。眩笠雨とか降り来て、いと慌しければ、皆歸り給はむとするに、笠も取り敢へず。さる心も無きに、萬づ吹き散らし、又なき風なり。波いと厳しう立ち来て、人々の足を空なり。海的面は袈を張りたらむやうに光り満ちて、雷鳴り閃く。落ちかゝる心地して、辛うじて辿り来て、「斯かる目は見ずもあるかな。風などは吹けど、氣色づきてこそあれ。淺ましう珍らかなり」と感ふに、なほ止まず鳴り満ちて、雨の脚當る所通りぬべく、はらめき落つ。斯くて世は盡きぬるにやと、心細く思ひ感ふに、君は長閑やかに經打誦じておはす。暮れぬれば雷少し鳴り止みて、風ぞ夜も吹く。多く立てつる願の力なるべし。人々「今暫し斯くだにあらば、浪に引かれて入りぬべかりけり。高潮といふものになむ、取り敢へず人損はるゝとは聞けど、いと斯かる事は、まだ知らず」と言ひ合へり。曉方皆打休みたり。君も聊か寝入り給へれば、その様とも見えぬ人來て、「など、宮より召あるには参り給はぬ」とて、辿り歩くと見るに、驚きて、さは海の中の龍王の、いといたる物愛でするものにて、見入れたる

(一) 帷幕の類

(二) 一方と人形とに掛く

(三) 俄雨

(四) 思ひがけなかつたので

なりけりと思すに、いと物むつかしう、この住居堪へ難く思しなりぬ。

此物語の起りに、説々ありといへども、……大齋院遷子内親王
村上天十宮より上東門院へ、珍
らかなる草子や侍ると尋ね申させ給ひけるに、宇津保・竹取やうの古物語は目馴れたれ
ば、新しく作り出して奉るべき由、式部に仰せられければ、石山寺に通夜して、この事
を祈り申すに、折しも八月十五夜の月湖水に映りて、心の澄み渡るまゝに、物語の風情
心に浮びたるを、忘れぬ先にとて、佛前に有りける大般若の料紙を本尊に申受けて、先
づ須磨・明石の兩卷を書き留めけり。これに依りて須磨の卷に、今宵は十五夜なりけり
と思し出でてとは侍るとかや。後に罪障懺悔の爲に、般若一部六百卷を自ら書きて奉納
しける。今に彼の寺に有りと云々。

——河海抄 卷一、料簡——

爲章若き程、この河海の説を信じて、かの自筆の般若見まほしく、石山にて相知れる坊
に逗留して、その事を尋ね探り侍りしに、はやくそとごと虚言にてぞ侍りし。但し源氏の聞と名
づけて、式部が畫像を畫き、此頃やうの机・硯などを設けたるは、何れの世何人の好事
にや。

——紫女七論其七、正傳説誤——

明石

(二七三月二八歌)

二條院より雨を肩しての見舞の使者——猶止まぬ風雨・籠居の落雷——
 父帝の夢の諭——明石入道の迎の船・須磨より明石へ・濱館のかしづき
 ——月前の祕曲・入道が問はず語りの愛女の上——源氏と明石上文の贈
 答——二條太政大臣（前の右大臣）薨去・大后の御惱——岡邊の宿に明
 石上を訪ふ十三夜の光君——自責と紫上への玉章——源氏召還の宣旨・
 喜びと悲しみ——懐胎の明石上との惜別・又逢ふまでの形見の琴・離愁
 ・闇に昏れ惑ふ入道——出發・著京・還任・一陽來復の慶び



なほ雨風止まず、雷鳴り鎮まらで日頃になりぬ。いと物佗しき事數知らず、來し方行く先悲しき御有様に、心強うしもえ思しなす。如何にせまし。斯かりとて都に歸らむ事も、まだ世に許されも無くては、人笑はれなる事こそ増らめ、猶これより深き山を求めてや跡絶えなましと思すにも、波風に騒がれてなんと人の言ひ傳へむ事、後の世までも、いと輕々しき名をや流し果てむと思し亂る。御夢にも、たゞ同じさまなる物のみ來つゝ、纏はし聞ゆと見給ふ。雲間も無くて明け暮るゝ日數に添へて、京の方もいと覺束なく、斯くながら身をはふらかしつるにやと、心細う思せど、頭差出づべくもあらぬ空の亂れに、出で立ち參る人もなし。二條院よりぞ、強ちに怪しき姿にて、濡ち參れる。道交ひにてだに、人か何ぞとだに御覽じ分くべくもあらず、先づ追ひ拂ひつべき賤男の、哀れに睦まじう思さるゝも、我ながら忝く、屈しにける心の程思ひ知らる。御文には、

紫淺ましく小歇みなき頃の氣色に、いと空さへ閉づる心地して、眺め遣る方無くなむ。
 浦風や如何に吹くらむ思ひ遣る袖打濡らし波聞なき頃

哀れに悲しき事どもを書き集め給へり。引開くるより、いと汀増りぬべく、搔昏らす心地し給ふ。使者「京にもこの雨風、いと怪しき物の諭なりとて、仁王會など行はるべしとなむ聞え侍りし。内裏に參り給ふ上達部なども、すべて道閉ちて、政も絶えてなむ侍る」など、はかしくしうもあらず、頑しう語りなせど、京

(一) 行く人もとまるも袖の涙川汀のみこそぬれまさりけれ (土佐日記)
 君を惜しむ涙落ち添ふこの川の汀まさりて流るべらなり (貫之集、別)

(三) 仁王經を讀誦して七難
 即滅七福即生を祈る法會

の方の事と思せば、いぶかしうて、御前に召し出でて問はせ給ふ。其たゞ例の雨の小歌みなく降りて、風も時々吹き出でつゝ、日頃になり侍るを、例ならぬ事に驚き侍るなり。いと斯く地の底通るばかりの氷降り、雷の鎮まらぬ事は侍らざりき」など、いみじきさまに驚き懼ぢて居る顔のいと辛きにも、心細さ増りける。斯くしつゝ世は盡きぬべきにやと思さるゝに、その又の日の曉より風いみじう吹き、潮高う満ちて、浪の音荒き事、巖も山も残るまじき氣色なり。雷の鳴り閃く様、更に言はむ方なくて、落ち懸かりぬと覺ゆるに、ある限りさかしき人なし。「我は如何なる罪を犯して、斯く悲しき目を見るらむ。父母にも逢ひ見ず、愛しき妻子の顔をも見で、死ぬべき事」と歎く。君は御心を鎮めて、何ばかりの過ちにてか此の渚に命をば極めむと、強う思しなせど、いと物騒がしければ、いろ／＼の幣帛捧げさせ給ひて、眞住吉の神、近き境を鎮め守り給へ。眞に跡を垂れ給ふ神ならば助け給へ」と、多くの大願を立て給ふ。各々自らの命をばさるものにて、斯かる御身の、又無き例に沈み給ひぬべき事の、いみじう悲しきに、心を起して、少し物覺ゆる限りは、身に代へて、この御身一つを救ひ奉らむとよみて、諸聲に佛神を念し奉る。人々「帝王の深き宮に養はれ給ひて、いろ／＼の樂しみに驕り給ひしかど、深き御慈み大八洲に普く、沈める輩をこそ多く浮べ給ひしか。今何の報にか、許多横ざまなる波風には溺ほれ給はむ。天地斷り給へ。罪無くて罪に當り、官位を取られ、家を離れ、境を去りて、明暮安き空なく歎き給ふに、斯く悲しき目をさへ見、命盡きなむとするは、前の世の報か、此の世の犯か。神佛明らかにましまさば、この憂へ息め給へ」と、御社の方に向けて、様々の願を立て、又海の中の龍王、萬づの神達に願立てさせ給ふに、いよ／＼鳴り轟きて、おはしますに續きたる廊に落ち懸かりぬ。炎燃え上りて、廊は焼けぬ。心魂なくて、ある限り感ふ。後の方なる大炊殿と思しき

(*) 炊事の雑合

屋に移し奉りて、上下となく立ち込みて、いと亂がはしく泣きとよむ聲、雷にも劣らず。空は墨を磨りたるやうにて、日も暮れにけり。

やう／＼風直り、雨の脚しめり、星の光も見ゆるに、この御座所のいと珍らかなるも、いと辱けて、寢殿に返し移し奉らむとするに、焼け残りたる方も疎ましげに、許多の人の踏み轟かし惑へるに、御簾なども皆吹き散らしてけり。夜を明してこそはと辿り合へるに、君は御念誦し給ひて、思し廻らすに、いと心慌し。月さし出でて、潮の近く満ち來ける跡も露に、名殘猶寄せ返る浪荒きを、柴の戸押開けて眺めおはします。近き世界に、物の心を知り、來し方行く先の事打覚え、とやかくやとはかくしう悟る人も無し。あやしき海士どもなどの、貴き人おはする所とて、集まり参りて、聞きも知り給はぬ事どもを轉り合へるも、いと珍らかなれど、え追ひも拂はず。海士「この風今暫し歇まざらましかば、潮上りて残る所無からまし。神の助、疎かならざりけり」と言ふを聞き給ふも、いと心細しと言へば疎かなり。

源海にます神の助にかゝらずば潮の八百會にさすらへなまし

終日にいり揉みつる風の騒ぎに、さこそ言へいたう困じ給ひにければ、心にもあらずうちまどろみ給ふ。辱き御座所なれば、唯寄り居給へるに、故院の唯おはしましし様ながら立ち給ひて、眞など斯く怪しき所には物するぞ」とて御手を取りて引き立て給ふ。眞住吉の神の導き給ふ儘に、はや船出して、この浦を去りね」と宣はす。いと嬉しくて、源「長き御影に別れ奉りにし此方、様々悲しき事のみ多く侍れば、今はこの渚に身を捨て侍りなまし」と聞え給へば、眞「いと有るまじき事。これは唯聊かなる物の報なり。いみじき憂ひに沈むを見るに、堪へ難くて、海に入り、渚に上り、いたく困じにたれど、斯かる序に、内裏に奏すべき事あ

るによりなむ、急ぎ上りぬる」とて、立ち去り給ひぬ。飽かず悲しくて、御供に参りなむと泣き入り給ひて、見上げ給へれば、人も無くて、月の顔のみきら／＼として、夢の心地もせず、御氣はひ留まれる心地して、空の雲哀れに棚引けり。年頃夢の中にも見奉らで戀しう覺束なき御様を、仄かなれど、さだかに見奉りつるのみ、面影に覺え給ひて、我が斯く悲しみを極め、命盡きなむとしつるを、助に翔り給へると哀れに思すに、能くぞ斯かる騒ぎもありけると、名残頼もしう、嬉しと覺え給ふ事限りなし。胸つと塞がりて、なかく／＼なる御心惑ひにぞ、現の悲しき事も打忘れて、夢にも御答を今少し聞えずなりぬる事といふせさに、又や見え給ふと、殊更に寝入り給へど、更に御目も合はで、曉方になりけり。

渚に小さやかなる船寄せて、人二三ばかり、この旅の御宿りを指して來。何人ならむと問へば、明石の浦より、前の守新發意の、御船装ひて参れるなり。「源少納言侍ひ給はば、對面して事の心取り申さむ」と言ふ。良清驚きて、早入道はかの國の得意にて、年頃相語らひ侍りつれど、私に聊か相怨むる事侍りて、殊なる消息をだに通はさで、久しうなり侍りぬるを、波の紛れに、如何なる事かあらむ」とおぼめく。君の御夢なども思し合はする事もありて、早會へ」と宣へば、船に往きて會ひたり。さばかり烈しかりつる波風に、いつの間にか船出しつらむと、心得難く思へり。去ぬる朝日の日の夢に、様異なる者の告げ知らずる事侍りしかば、信じ難き事と思ふ給へしかど、「十三日にあらたなる驗見せむ。船を装ひ設けて、必ず、雨風止まば、この浦に寄せよ」と、重ねて示す事の侍りしかば、試に船の装ひを設けて待ち侍りしに、殿しき雨風、雷の驚かし侍りつれば、他の朝にも、夢を信じて國を助くる類多う侍りけるを、用ゐさせ給はぬまでも、この

(一) 良清

(二) 知人

戒の日を過ぎ、この由を告げ申し侍らむとて、船出し侍りつるに、怪しき風細う吹きて、この浦に著き侍る事、眞に神の導違はずなむ。此處にも若し知召す事や侍りつらむとてなむ。いとも憚り多く侍れど、この由申し給へ」と言ふ。良清忍びやかに傳へ申す。君は思しまはすに、夢現さま／＼静かならず、諭のやうなる事どもを、來し方行く末思し合はせて、世の人の聞き傳へむ後の謗も安からざるべきを憚りて、眞の神の助にもあらむを、背くものならば、又これより勝りて、人笑はれなる目を見む。現の人の心だに猶苦し。果敢なき事をも且見つゝ、我より齡勝り、若しは位高く、時世のよせ今一際勝る人には、靡き隨ひて、その心向けを辿るべきものなり。退きて咎なし」とこそ、昔の賢しき人も言ひ置きけれ。實に斯く命を極め、世に又なき目の限りを見盡くしつ。更に後の跡の名を省くとも、猛き事もあらじ。夢の中にも天帝の御教へありつれば、又何事かを疑はむと思して、御返り宣ふ。早知らぬ世界に、珍らしき憂への限り見つれど、都の方よりとて、言問ひおこする人もなし。唯行方なき空の月日の光ばかりを、故郷の友と眺め侍るに、嬉しき釣船をなむ。かの浦に静やかに隠らふべき隈侍りなむや」と宣ふ。限り無く喜び、長まり申す。「ともあれ斯くもあれ、夜の明け果てぬ前に御船に奉れ」とて、例の親しき限り、四五人ばかりして奉りぬ。例の風出で來て、飛ぶやうに明石に著き給ひぬ。唯這ひ渡る程は片時の間といへど、猶怪しきまで見ゆる風の心なり。

濱のさま、實にいと心異なり。人繁う見ゆるのみなむ、御心に背きける。入道の領じ占めたる所々、海面に

(一) 背くは

(二) 信望

(三) 富貴而驕、自遺其咎、功成名遂身退、天之道(老子、第九章)

(四) 波にのみ濡れつるものを吹く風の便り嬉しきあまの釣船(後撰、雜三、貫之)

も山隠れにも、時々につけて、興を探すべき渚の管屋、行ひをして後の世の事を思ひ登ましつべき山水の面に、殿しき堂を立てて三昧行ひ、この世の設に、秋の田の實を刈り納め、残りの齡積むべき稻の倉町どもなど、折々所につけたる、見所ありてし集めたり。高潮に懼ちて、この頃、女などは岡邊の宿に移して住ませければ、この濱の館に心安くおはします。船より御車に奉り移る程、日漸々さしのぼりて、仄かに見奉るより、老も忘れ齡延ぶる心地して、笑み榮えて、先づ住吉の神を、かつく拜み奉る。月日の光を手を得奉りたる心地して、營み仕う奉る事理なり。所の様をば更にも言はず、作りなしたる心ばへ、木立立石・前裁などの有様、えも言はぬ入江の水など、繪に畫かば、心の至り少なからむ繪師は、畫き及ぶまじと見ゆ。月頃の御住居よりは、こよなく明らかに懐かし。御しつらひなどえならすして、住ひける様など、實に都のやんごとなき所々に異ならず。艶に眩き様は、勝りさまにぞ見ゆる。

少し御心鎮まりては、京の御文ども聞え給ふ。參れりし使は、「今は、いみじき道に出で立ちて、悲しき目を見る」と泣き沈みて、あの須磨に留まりたるを召して、身に餘れる物ども多く賜ひて遣はす。睦まじき御祈禱の師ども、さるべき所々には、この程の御有様、委しく言ひ遣はすべし。二條院の哀れなりし程の御返りは、書きも遣り給はず、打置きく押拭ひつゝ聞え給ふ御氣色、なほ殊なり。

源 返すくいみじき目の限りを見盡くし果てつる有様なれば、今はと世を思ひ離るゝ心のみ増り侍れど、「鏡を見ても」と宣ひし面影の離るゝ世無きを、斯く覺束ながらやと、許多悲しき様々の愁はしさ

(一) 入道は (二) 庭石 (三) 出家するの
(三) 別れても影だにとまるものならば鏡を見ても慰めてまし(須磨卷、禁上の歌、二二七頁参照)

は差措かれて、

遙かにも思ひ遣るかな知らざりし浦より遠に浦傳ひして

夢の中なる心地のみして、覺め果てぬ程、如何に僻事多からむ。

と、そこはかとなく書き亂り給へるしもぞ、いと見まほしき側目なるを、いとこよなき御志の程と、人々見奉る。各々故郷に心細げなる言傳すべかめり。小歌み無かりし空の氣色、名残なく澄み渡りて、漁する海士ども誇らしげなり。須磨はいと心細くて、海士の岩屋も稀なりしを、人繁き厭ひはし給ひしかど、此處は又、様異に哀れなる事多くて、萬づに思し慰まる。

主人の入道、行ひ勤めたるさま、いみじう思ひ澄ましたるを、唯この女一人を持て煩ひたる氣色、いと傍痛きまで、時々漏らし愁へ聞ゆ。御心地にも、をかしと聞き置き給ひし人なれば、斯く覺えなくて廻りおはしたるも、さるべき契りあるにやと思しながら、猶斯う身を沈めたる程は、行ひより外の事は思はじ。都の人も、徒なるよりは、言ひしに違ふと思さむも、心恥かしう思さるれば、氣色だち給ふ事なし。事に觸れて、心ばせ有様なべてならずも有りけるかなと、ゆかしう思されぬにしもあらず。此處には畏まりて、自らもをさく參らず、物隔たりたる下の屋に侍ふ。さるは明暮見奉らまほしう、飽かず思ひ聞えて、如何で思ふ心を叶へむと、佛神をいよく念じ奉る。年は六十ばかりになりたれど、いと清げにあらまほしう、行ひさらばひて、人の程のあてはかなればにやあらむ、打僻みほれくしき事はあれど、古の事をも見知りて、物きたなからず、由づきたる事も交れば、昔の物語などせさせて聞き給ふに、少しつれくの紛れなり。

(一) 禁上

(二) 入道は

(三) 行ひの爲にすつかり瘦せて

年頃 公 私御暇なくて、さしも聞き置き給はぬ世の故事どもも、崩し出でて聞ゆ。斯かる所をも人をも見ざらましかば、さうくしくやとまで、與ありと思す事も交る。斯うは馴れ聞ゆれど、いと氣高う心恥かしき御有様に、さこそ言ひしか、慎ましうなりて、我が思ふ事は心の儘にもえ打出で聞えぬを、心許なう口惜しと、母君と言合はせて歎く。正身も、おしなべての人だに目易きは見えぬ世界に、世には斯かる人もおはしけりと見奉りしにつけて、身の程知られて、いと遙かにぞ思ひ聞えける。親達の斯く思ひ扱ふを聞くにも似げなき事かなと思ふに、徒なるよりは物哀れなり。

四月になりぬ。更衣の御装束、御帳の帷子など、由あるさまにし出づ。萬づに仕う奉り營むを、いとほしう漫なりと思せど、人様の飽くまで思ひ上りたる様の貴なるに、思し免して見給ふ。京よりも、打頻りたる御訪らひども、弛みなく多かり。長閑やかなる夕月夜に、海の上曇りなく見え渡れるも、住み馴れ給ひし故郷の池水に、思ひ紛へられ給ふに、言はむ方なく戀しき事何方とも無く、行方なき心地し給ひて、唯目の前に見遣らるゝは、淡路島なりけり。あはと遙かに「など宣ひて、

あはと見る淡路の島のあはれさへ残る限なく澄める夜の月

久しう手も觸れ給はぬ琴を、袋より取り出で給ひて、果敢なく搔鳴らし給へる御様を、見奉る人も、安からず哀れに悲しう思ひ合へり。廣陵といふ手を、有る限り弾き澄まし給へるに、かの岡邊の家も、松の響、波の音に合ひて、心ばせある若き人は、身に泌みて思ふべかめり。何とも聞き分くまじき、此面彼面のしは

- (一) 女自身も (二) 淡路にてあはと遙かに見し月の近き今宵は所がらかも(新古今、雜上、朝恒)
- (三) 氣の毒に、これまででしなくとも (四) 廣陵散と云ふ秘曲 (五) 老人等、賢木卷二〇三頁註(五) 参照

ぶるひ人どもも、漫はしくて、濱風をひき歩く。入道もえ堪へで、供養法たゆみて、急ぎ參れり。入更に、背きにし世の中も、取り返し思ひ出でぬべく侍る。後の世に願ひ侍る所の有様も、思う給へ遣らるゝ夜のさまかな」と泣くく愛で聞ゆ。我が御心にも、折々の御遊び、その人かの人の琴笛、若しは聲の出でしさま、時々につけて、世に愛でられ給ひし有様、帝より始め奉りて、持て冊き崇められ奉り給ひしを、人の上も我が御身の有様も、思し出でられて、夢の心地し給ふ儘に、搔鳴らし給へる聲も、心凄く聞ゆ。古人は涙も止め敢へず、岡邊に琵琶、箏の琴取りに遣りて、入道琵琶の法師になりて、いとをかしう珍らしき手一つ二つ弾き出でたり。箏の御琴参りたれば、少し弾き給ふも、様々いみじうのみ思ひ聞えたり。いとさしも聞えぬ物の音だに、折からこそは勝るものなるを、遙々と物の滞りなき海面なるに、なか／＼、春秋の花紅葉の盛りなるよりは、唯そこはかとなく繁れる陰ども艶かしきに、水鶏の打叩きたるは、「誰が門鎖して」と哀れに覺ゆ。音もいと二無う出づる琴どもを、いと懐かしう弾き馴らしたるも、御心留まりて「これは、女の、懐かしきさまにて、しどけなく弾きたるこそをかしけれ」と、大方に宣ふを、入道はあいなく打笑みて、入遊ばすより懐かしきさまなるは、何處のか侍らむ。なにがし延喜の御手より弾き傳へたること、三代になむ成り侍りぬるを、かう拙き身にて、この世の事は捨て忘れ侍りぬるを、物の切にいぶせき折々は、搔鳴らし侍りぬるを、怪しうまねぶ者の侍るこそ、自然にかの前大王の御手に通ひて侍れ。山伏の僻耳に、松風を聞き渡し侍るにやあらむ。如何で、これ忍びて聞召させてしがな」と聞ゆる儘に、打戦きて涙落すべかめり。

- (一) まだ背にうち來 (二) 醒醐天皇 (三) 自分の娘(明石上を)指す (四) 私の師某親王 (五) 二六二頁註(一) 参照
- て叩く水鶏かな誰 なるらむ(河海抄)

君、（一）琴を琴とも聞き給ふまじかりける邊に、妬ねたき業わざかな」とて押遣り給ふ。眞まこと怪あやしう昔より、箏びんは女むすめなむ
 弾ひき取る物なりける。嵯峨さやまの御傳みつたへにて、女五にようごの宮みや、さる世の中の上手うまに物し給ひけるを、その御筋みすぢにて、
 取り立てて傳ふる人無し。すべて只今世に名を取れる人々、搔撫さかたの心遣りばかりにのみあるを、此處こゝに斯かう
 弾ひき込め給へりける、いと興きようありける事かな。如何いかでかは聞くべき」と宣のたまふ。人聞ひとき召よさむには何の憚はげりかは
 侍らむ。御前に召しても、商人しょうにんの中にてだにこそ、古言ふること聞き稱揚しょうやうす人は侍りけれ。琵琶びばなむ眞まことの音を弾ひき鎮しづ
 むる人、古いにしへも難かたう侍りしを、をさく滞とどまる事なう、懐なつかしき手など筋すぢ殊ことになむ。如何いかで迎むかへるにか侍らむ。
 荒あき浪なみの聲こゑに交まじるは悲かなしうも思おもう給へられながら、搔集さかまむる物歎なげかしさ紛まるゝ折まりも侍る」など、好このき居ゐた
 れば、をかしと思して、箏びんの琴取りかへて賜たまはせたり。實じつにいと過すして搔かい弾ひきたり。今の世に聲こゑえぬ筋すぢ彈ひ
 きつけて、手遣てづかひいといたう唐からめき、搖ゆの音ね深ふかう澄すましたり。伊勢いせの海うみならねど、「清きよき渚しづに貝かいや拾ひろはむ」な
 ど、聲こゑよき人に諺ことわざはせて、我われも時々ときとき拍子はつし取りて、聲打こゑうち添そへ給ふを、琴こと弾ひきさしつゝ、愛あいで聞きゆ。御菓子おんかきなど珍めづ
 らしきさまにて参まらせ、人々に酒強しよひそしなど、自おのら物忘ものわれもしぬべき夜のさまなり。
 いたく更さらけ行く儘ままに、濱風はまかぜ涼すずしうて、月も入方いりかたになる儘ままに澄すみ増まりて、靜しずかなる程ほどに、御物語おんものがたり残りなく聞きえ
 て、この浦うらに住すみ始めし程ほどの心遣こゝろづかひ、後の世を勤こゝろづかむるさま、搔崩さかぶし聞きえて、この女むすめの有様ありさま、問とはず語かたりに聞き

- (一) 松風に耳馴れにける山伏は琴を琴とも思はざりけり
- (二) 繁子内親王
- (三) 白樂天が潯陽江に客を送り、今は落魄して商人の妻となつた長安の名
- (四) 娘は
- (五) 風流がり
- (六) 左手が拵り抑へる音
- (七) 伊勢の海の、いせのうみの、清き渚の、潮がひに、な
- (八) 過し
- (九) 松風は耳馴れにける山伏は琴を琴とも思はざりけり
- (一〇) 壽文法師「花鳥餘情」
- (一一) 妓の弾く琵琶に感涙を流して琵琶行を作つた故事
- (一二) 伊勢の海、いせのうみの、清き渚の、潮がひに、な
- (一三) 催馬樂、伊勢海
- (一四) のりそや摘まむ、貝や拾はむ、イヤ、玉や拾はむ、イヤ
- (一五) 催馬樂、伊勢海

ゆ。をかききものの、流石りうせきに哀あはれと聞き給ふ節せつ々々もあり。い取り申し難がたき事ことなれど、我が君、斯かう覺おぼえ
 なき世界よ界かい

- (一) 娘、明石上
- (二) 晨朝・日中・日没・初夜・中夜
- (三) この娘は
- (四) 若紫卷、七三頁
- (五) 及び須磨卷、二四
- (六) 自分の如き亡命客を

と、思ひ屈じつるを、さらば導き給ふべきにこそあなれ。心細き獨寝の慰めにも」など宣ふを、限りなく嬉しと思へり。

入「獨寝は君も知りぬやつれ」と思ひあかしの浦淋しさを

まして年月思う給へ渡るいぶせさを、推し量らせ給へ」と聞ゆるけはひ、打戦きたれど、流石に故なからず。源「されど浦馴れ給ひつらむ人は」とて、

源 旅衣うらがなしさに明しかね草の枕は夢も結ばず

と打亂れ給へる御様は、いとぞ愛敬つき、言ふ由なき御けはひなる。數知らぬ事ども聞え盡くしたれど、煩しや。僻事どもに書きなしたれば、いとゞ痴に頑しき入道の心ばへも顯はれぬべかめり。

思ふ事かつく叶ひぬる心地して、涼しう思ひ居たるに、又の日の晝つ方、岡邊に御文遣はす。心恥かしきさまなめるも、なか／＼斯かる物の隈にぞ、思ひの外なる事も籠るべかめると、心遣ひし給ひて、高麗の胡桃色の紙に、えならず引繕ひて、

源 遠近も知らぬ雲居に眺め佗びかすめし宿の梢をぞ訪ふ

思ふには。

とばかりやありけむ、入道も、人知れず待ち聞ゆとて、かの家に來居たりけるも著ければ、御使いと眩きま

(一) 入道は

(二) 源から入道の娘

(三) 朝鮮産の紙で、薄青を白に重ねたもの

(四) 父入道の言を頼りに

(五) 思ふには忍ぶる

事ぞ負けにける色には出でじと思ひ

しものを(古今、戀一)

で酔はず。御返りいと久し。内に入りて嗟せど、女は更に聞かず。いと恥かしげなる御文のさまに、さし出でむ手つきも恥かしう慎ましう、人の御程我が身の程、思ふにこよなくて、心地悪しとて寄り臥しぬ。言ひ佗びて入道ぞ書く。

入いとも長きは、田舎びて侍る袂に、包み餘りぬるにや、更に見給へも及び侍らぬ長さになむ。さるは、

眺むらむ同じ雲居を眺むるは思ひも同じ思ひなるらむ

となむ見給ふる。いとすき／＼しや。

と聞えたり。陸奥國紙に、いたう古めきたれど、書きさま由ばみたり。實にも好きたるかなと、目覺しう見給ふ。御使に、なべてならぬ玉裳など被けたり。又の日、源宣旨書は、見知らずなむ」とて、

源「いぶせくも心に物を惱むかなやや如何にと問ふ人も無み

言ひ難み」と、この度はいといたうなよびたる薄様に、いと美しげに書き給へり。若き人の愛でさらむも、いと餘り埋れたからむ。めでたしとは見れど、准ひならぬ身の程の、いみじう甲斐なければ、なか／＼、世に在るものと尋ね知り給ふにつけて、涙ぐまれて、更に例の動なきを、せめて言はれて、浅からず染めたる紫の紙に、墨つき濃く薄く紛らはして、

明石 思ふらむ心の程やや如何にまだ見ぬ人の聞きか惱まむ

(一) 嬉しきを何に包まむ唐衣袂ゆたかにたてと言はましを(古今、雜上)

嬉しきを昔は袖に包みけり今宵は身にも餘りぬかな(新勅撰、賀)

(二) 藻に掛く

がたみ心に物の歎かしきかな(一條院)(花鳥餘情)

まだ見ぬ人のいひ聞き惱み給ふ筈がない

手のさま書きたるさまなど、やんごとなき人にいたう劣るまじう上手めきたり。京の事覚えて、をかしと見給へど、打頻りて遣はさむも、人目慎ましければ、二三日隔てつゝ、つれづれなる夕暮、若しは物哀れなる曙などやうに紛らはして、折々人も同じ心に見知りぬべき程推し量りて、書き交し給ふに、似げなからず。心深く思ひ上りたる気色も、見では止まじと思すものから、良清が領じて言ひし気色も目覺しう、年頃心づけてあらむを、目の前に思ひ違へむいとほしう思し廻らされて、人進み参らば、さる方にて紛らはしてむと思せど、女はた、なか／＼やんごとなき際の人よりもいたう思ひ上りて、妬げにもてなし聞えたれば、

二條太 弘徽殿
政大臣 大后
桐壺院 今上(朱雀)
更 桐 衣 壺 源氏

心競べにてぞ過ぎける。京の事を、斯く關隔たりては、愈々覺束なく思ひ聞え給ひて、如何にせまし、戯れにくくもあるかな。忍びてや迎へ奉りてまじと、思し弱る折々あれど、さりとも斯くてやは年を重ねむ。今更に入悪き事をやはと、思し鎮めたり。

その年、朝廷に、物の諷頻りて、物隨がしき事多かり。御慎しみ、内裏にも宮にも限り無くせさせ給ふ。太政大臣亡せ給ひぬ。理の御齡なれど、次々に自ら騒がしき事あるに、大宮もそこはかと無う煩ひ給ひて、程程れば弱り給ふやうなる、内裏に思し歎く事様々なり。猶この源氏の君、眞に犯す事無きにて斯く沈むならば、必ずこの報ありなむとむ覺え給ふ。昔今は猶本の位をも賜ひてむ」と、度々思し宜ふを、大后「世の抵牾淡々しきやうなるべし。罪に懼ぢて、都を去りし人を、三年をだに過さず赦

(一) 先方で
(二) 紫上

(三) ありぬやと試み
がてら逢ひ見ねば

たはぶれにくきまでぞ
戀しき(古今、誹諧)

(四) 御母弘徽殿大后
(五) 前右大臣

されむ事は、世の人も如何言ひ傳へ侍らむ」など、后固う諫め給ふに、思し憚る程に、月日重りて、御惱みども様々に重り増らせ給ふ。

明石には、例の、秋は濱風の異なるに、獨寝も眞實に物佗しうて、入道にも折々語らはせ給ふ。眞とかう紛らはして、此方参らせよ」と宣ひて、渡り給はむ事をばあるまじう思したるを、正身はた更に思ひ立つべくもあらず。いと口惜しき際の田舎人こそ、假に下りたる人の打解言につきて、さ様に軽らかに語らふ業をもすなれ。人數にも思されざらむものゆゑ、我はいみじき物思ひをや添へむ。斯く及びなき心を思へる親達、世籠りて過す年月こそ、あいな頼みに行末心にくく思ふらめ。なか／＼なる心をや盡くさむと思ひて、唯この浦におはせむ程、斯かる御文ばかりを聞え交さむこそ疎かならね。年頃音にのみ聞きて、いつかはさる人の御有様を仄かにも見奉らむなど、遙かに思ひ聞えしを、斯く思ひ掛けざりし御住居にて、眞ほならねど仄かにも見奉り、世に無きものと聞き傳へし御琴の音をも風につけて聞き、明暮の御有様覺束なからで、斯くまで世にあるものと思し尋ぬるなどこそ、斯かる海士の中に朽ちぬる身に餘る事なれなど思ふに、いよ／＼恥かしうて、つゆも氣近き事は思ひ寄らず。親達は、許多の年頃の祈りの叶ふべきを思ひながら、ゆくりかに見せ奉りて、思し數まへざらむ時、如何なる歎きをかぜむと思ひ遣るに、ゆ／＼して、めでたき人と聞ゆとも、辛ういみじうもあるべきを、目に見えぬ佛神を頼み奉りて、人の御心をも宿世をも知らでなど、打返し思ひ亂れたり。君は、「この頃の波の音に、かの物の音を聞かばや。さらすば甲斐なくこそ」など、常は宣

(一) 自分がかうして
(二) 頼もしく

(三) 軽率に御心に從
うては

(四) 思慮もなく源氏
君に

(五) 君の御心も、娘の宿縁も

ふ。忍びて宜しき日見せて、母君のとかく思ひ煩ふを聞き入れず、弟子共などにだに知らせず、心一つに起ち居輝くばかりしつらひて、十三日の月の花やかにさし出でたるに、唯、「あたら夜」と聞えたり。君は好きのさまやと思せど、御直衣奉り引整ひて、夜更かして出で給ふ。御車は二無く作りたれど、所狭しとて御馬にて出で給ふ。惟光などばかりを侍はせ給ふ。や、速く入る所なりけり。道の程も、四方の浦々見渡し給ひて、思ふどち見まほしき入江の月影にも、先づ戀しき人の御事を思ひ出で聞え給ふに、やがて馬引過ぎて赴きぬべく思す。

源「秋の夜の月毛の駒よ我が戀ふる雲居に翔れ時の間も見む」と打獨言たれ給ふ。造れるさま木深く、いたき所勝りて、見所ある住居なり。海の面は殿しう面白く、これは心細く住みたるさま、此處に居て思ひ残す事はあらかしと、住む人の心思し遣らるゝに物哀れなり。三昧堂近く、鐘の聲松の風に響き合ひて、物悲しう、岩に生ひたる松の根ざしも、心ばへあるさまなり。前裁どもに蟲の聲を盡くしたり。此處彼處の有様など御覽す。女住ませたる方は、心殊に磨きて、月入れたる櫺の戸口、氣色ばかり押開けたり。打休らひ何かと宣ふにも、斯うまでは見え奉らじと深く思ふに、物歎かしうて、打解けぬ心さまを、こよなうも人めいたるかな。さしもあるまじき際の人だに、斯ばかり言ひ寄

(一) 入道は
(二) あたら夜の月と花とを同じくは心知れらむ人に見せばや(後撰、春下)
(三) 思ふどちいざ見に行かむ玉津鳥入江の底に沈む月影(奥入)
(四) 紫上
(五) このまゝ京へ
(六) 久方の月毛の駒もうち速め來ぬらむとのみ君を待つ(萬葉七)
(七) 凝つた
(八) 濱邸の方は
(九) 明石上は
かな(古今六帖、二) 遠くありて雲居に見ゆる妹が家に早くいたらむ歩め黒駒

りぬれば、心強うしもあらず慣らひたりしを、いと斯く寢れたるに侮らはしきにやと、妬う様々に思し惱めり。情なう押立たむも、事のさまへ違へり。心競べに負けむこそ人悪けれなど、亂れ怨み給ふさま、實に物思ひ知らむ人にこそ見せまほしけれ。近き几帳の紐に、箏の琴の引鳴らされたるも、けはひしどけなく、打解けながら掻きまさぐりける程見えてをかしければ、「源」この聞き慣らしたる琴をさへや」など、萬づに宜ふ。

源 睦言を語り合はせむ人もがな憂き世の夢も半ば覺むやと
明明けぬ夜にやがて惑へる心には何れを夢とわきて語らむ

仄かなるけはひ、伊勢の御息所にいとよう覺えたり。何心も無く打解けて居たりけるを、斯う物覺えぬに、いとわりなくて、近かりける曹司の中に入りて、如何で固めけるにかいと強きを、強ひても押立ち給はぬさまなり。されどさのみもいかでかはあらむ。人様いと貴に聳えて、心恥かしきはひぞしたる。斯う強ちなりける契りを思すにも、淺からず哀れなり。御志の近増りするなるべし。常は厭はしき夜の長さも、疾く明けぬる心地すれば、人に知られじと思すも、心慌しうて、細かに語らひ置きて出で給ひぬ。

御文いと忍びてぞ今日はある。あいなき御心の鬼なりや。此處にも、斯かる事如何で漏らさじと裏みて、御使ことぐしくももてならぬを、胸いたく思へり。斯くて後は、忍びつゝ時々おはす。程も少し離れたるに、自ら物言ひさがなき海士の子もや立ち交らむと、思し憚る程を、さればよと思ひ歎きたるを、實に如何な

- (一) 自分が
- (二) 源は
- (三) 前の「あたら夜
- (四) 明石が今まで
- (五) 毎々噂に聞いてあるその琴までも
- (六) 六條御息所
- (七) 明石は
- (八) 良心の何となしの咎め
- (九) 女の方でも
- (十) 明石は

らむと、入道も極樂の願ひをば忘れて、唯この御氣色を待つ事にはす。今更に心を亂るも、いといとほしげなり。一條の君の、風の傳にも漏り聞き給はむ事は、戯れにても、心の隔てありけると思ひ疎まれ奉らむは、心苦しう恥かしう思さるゝも、強ちなる御志の程なりかし。斯かる方の事をば、流石に心留めて怨み給へりし折々、などてあや無きすさび事につけても、さ思はれ奉りけむなど、取返さまほしう、人の有様を見給ふにつけても、戀しさの慰む方なければ、例よりも御文細やかに書き給ひて、奥に、

眞や、我ながら心より外なる等閑事にて、疎まれ奉りし節々を、思ひ出づるさへ胸痛きに、又怪しう物果敢なき夢をこそ見侍りしか。斯う聞ゆる間はす語りに、隔てなき心の程は思ひ合はせよ。誓ひし事も。

など書きて、

何事につけても、

しほくと先づぞ泣かるゝ假初のみるめは蟹のすさびなれども

とある、御返り、何心なくらうたげに書きて、

業忍びかねたる御夢語りにつけても、思ひ合はせらるゝ事多かるに、
うらなくも思ひけるかな契りしをまつより浪は越えじものぞと

(一) 特別深い愛情

(二) 石明上の

(三) 明石上に逢うた

(四) 忘れじと誓ひし

事もあやまたず三

笠の山の神もこと

(五) 松と待つに掛く

君をおきて仇し心

を我が持たば末の

(古今、東歌みち

のくうた)

契りきなかたみに

松山浪越まじとは

(後拾遺、戀四、

清原元輔)

われ(奥入)

松山浪も越えなむ

袖を絞りつゝ末の

おいらかなるものから、徒ならずかすめ給へるを、いと哀れに打置き難く見給ひて、名残久しう忍びの旅寝もし給はず。女、思ひしも著きに、今ぞ眞に身も投げつべき心地する。行末短げなる親ばかりを頼もしきものにて、いつの世に人並々になるべき身とは思はざりしかど、唯そこはかとなくて過しつる年月は、何事をか心をも悩ましけむ。斯ういみじう物思はしき世にこそありけれど、かねて推し量り思ひしよりも、萬づに悲しけれど、なだらかにもてなして、憎からぬさまに見え奉る。哀れとは月日に添へて思し増せど、やんどとなき方の、覺束なくて年月を過し給ふが、徒ならず打思ひおこせ給ふらむが、いと心苦しければ、獨臥しがちにて過し給ふ。繪を様々書き集めて、思ふ事どもを書き付け、返り事聞くべきさまにし給へり。見む人の心に泌みぬべき物のさまなり。如何でか空に通ふ御心ならむ、二條の君も、物哀れに慰む方なく覺え給ふ折々、同じやうに繪を書き集め給ひつゝ、やがて我が御有様を、日記のやうに書き給へり。如何なるべき御有様どもにかあらむ。

年替りぬ。内裏に御薬の事ありて、世の中様々にのしる。當帝の御子は、右大臣の御女、承香殿の女御の御腹に、男御子生まれ給へる、二つになり給へばいと幼稚なし。春宮にこそは譲り聞え給はめ。朝廷の御後見をし、世を政つべき人を思し廻らすに、この源氏の斯く沈み給ふ事、いと可惜しうあるまじき事なれば、遂に後の御諫めをも背きて、赦され給ふべき定め出で來ぬ。去年より、后も御物怪に悩み給ひ、様々の物の諭頻り、騒がしきを、いみじき御慎しみどもをし給ふ驗にや、宜しうおはしましたしける、御目の悩みさへ、この頃重くならせ給ひて、物心細く思されければ、七月二十餘日の程に、又重ねて、京へ歸り給ふべき宣旨

(一) 明石上を

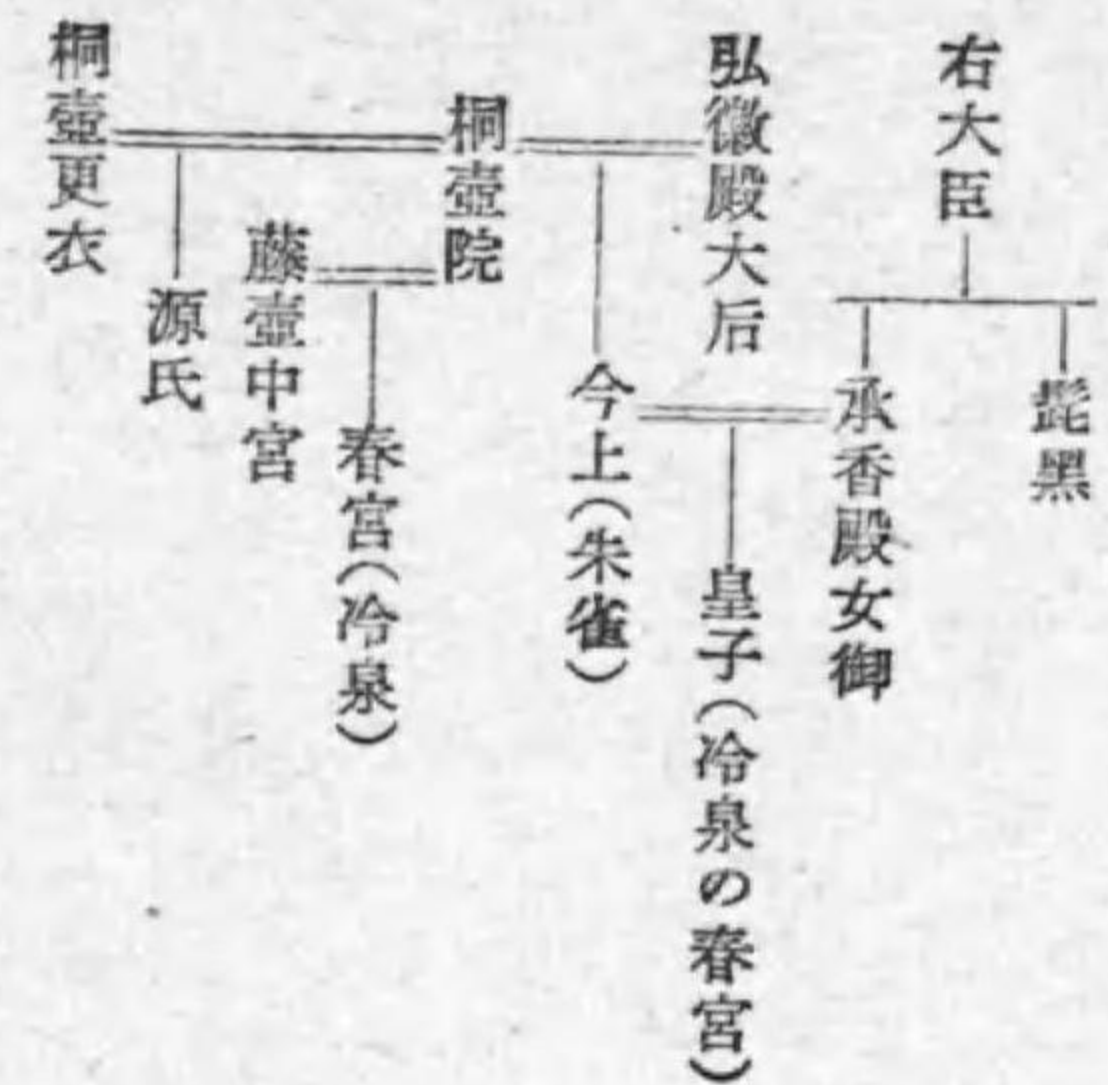
(二) 禁上の

(三) 禁の

(四) 弘徽殿の父とは別人

(五) 帝の

下る。終つひの事と思ひしかど、世の常なきにつけても、如何いかになり果つべきにかと歎き給ふを、斯う俄なれば、嬉しきにつけても、又この浦を今はと思ひ離れむ事を思し歎くに、入道、さるべき事と思ひながら、打聞うききくより胸塞むねふさがりて覺ゆれど、思ひの如榮ごとえ給はばこそは、我が思ひの叶ふにはあらめなど、思ひ直す。その頃は、夜がれ無く語り給ふ。六月むねつきばかりより、心苦しき氣色ありて惱みけり。斯く別れ給ふべき程なれば、



「あな憎、例の御癖ぞ」と見奉りむつかるめり。月頃は、つゆ人に氣色見せず、時々かい紛れなどし給へるつれなさを、この頃生憎あやふに、なか／＼の人の心盡くしにとつきじろふ。少納言せうなごんの導しるべして聞え出でし初めの事

- (一) 結局はかうなる
- (二) 結局はかうなる
- (三) 却つて愛情が深か
- (四) 退京の時は
- (五) 源は
- (六) 却つて明石の悲しみ
- (七) 良清、若紫卷、七二頁参照

など嘸なほき合へるを、徒ただならず思へり。明後日あしたばかりになりて、例のやうにいたうも深さで、渡り給へり。さやかに未だ見給はぬ容貌かたちなど、いと由々よしよししう氣高きさまして、目覺しうもありけるかなと、見捨て難く口惜しう思さる。さるべき様にして迎へむと思しなりぬ。さ様にぞ語り慰め給ふ。男の御容貌かたち有様、將た更にもいはず、年頃の御行ゆきひにいたく面瘦おもてすくせ給へるしも、言ふ方なくめでたき御有様にて、心苦しげなる氣色に打涙ぐみつゝ、哀れに深く契り給へるは、唯かばかりを幸ひにても、などか止まざらむとまで見ゆれど、めでたきにしも、我が身の程を思ふにも盡きせず。浪の聲、秋の風には猶響ひび殊ことなり。鹽しほ焼く煙けむり幽こもりに棚引きて、取集とめたる所のさまなり。

と宣へば、明あき 掻集かきつめて海士あまの焼く藻もの思ひにも今は甲斐無あがひきうらみだにせじ。哀れに打泣なみきて、言少ことすくななるものから、さるべき節ふしの御答おこたへなど淺あはからず聞ゆ。この常にゆかしがり給ふ物の音など、更に聞かせ奉らざりつるを、いみじう恨み給ふ。源みなもとのさらば、形見にも忍ぶばかりの「ことをだに」と宣ひて、京より持ておはしたりし、琴かみの御琴おんこと取りに遣はして、心殊こころごとなる調しらべを仄ひそかに搔鳴かきならし給へる、深き夜の澄めるには響こたへむ方なし。入道もえ堪へで、自ら筆ふでの琴こと取りて差入れたり。自らも、いと涙さへ、咬そされて留とどむべき方なきに、誘はるゝなるべし、忍びやかに調しらべべたる程、いと上衆じやうしゆめきたり。入道いんどうの宮の御琴おんことの音を、只今の又無なきものに思ひ聞えたるは、今めかしう、あなめでたと、聞く人の心行こころゆきて、容貌かたちさへ思ひ

- (一) 良清は
- (二) 出發が
- (三) 源の様子
- (四) 浦見と恨みに掛く
- (五) 明石
- (六) 藤壺

遣らるゝ事は、實にいと限りなき御琴の音なり。これは飽くまで弾き澄まし、心にくく妬き音ぞ優れる。この御心にだに、初めて哀れに懐かしう、まだ耳馴れ給はぬ手など、心やましき程に弾きさしつゝ、飽かず思さるゝにも、月頃、など強ひても聞き馴らさざりつらむと、悔しう思さる。心の限り、行く先の契りをのみし給ふ。琴は、源また掻き合はするまでの形見に」と宣ふ。女、

明「なほざりに頼め置くめる一(三)ことを盡きせぬ音にやかけて忍ばむ言ふともなき口ずさびを怨み給ひて、

源逢ふまでの形見に契る中の緒の調はことに變らざらなむ

この音達はぬ先に必ず逢ひ見むと、頼め給ふめり。されど唯、別れむ程のわりなさを思ひ咽びたるも、いと理なり。

立ち給ふ曉は、夜深う出で給ひて、御迎への人々も騒がしければ、心も空なれど、人間を計らひて、

源打捨てて立つも悲しき浦波の名残如何にと思ひ遣るかな

御返り、

明年經つる苦屋も荒れてうき波の歸る方にや身をたぐへまし

と打思ひける儘なるを見給ふに、忍び給へど、ほろ／＼と零れぬ。心知らぬ人々は、なほ斯かる御住居なれど、年頃と言ふばかり馴れ給へるを、今はと思すはさもある事ぞかし、など見奉る。良清などは、疎かならず思すなめりかしと憎くぞ思ふ。嬉しきにも、實に今日を限りにこの渚を別るゝ事、など哀れがりて、口々潮

(一) 琴に勝れた源の (二) 聴手の心にもどかしがらせる位の所 (三) 言と琴とに掛く

垂れ言ひ合へる事どもあめり。されど何かはとてなむ。入道今日の御設け、いと厳しう仕うまつれり。人々下の品まで、旅の装束珍らしきさまなり。いつの間にかし敢へけむと見えたり。御装ひは言ふべくもあらず、御衣櫃數多掛け侍はず。眞の都の土産にしつべき御贈物など、故づきて思ひ寄らぬ限なし。今日奉るべき狩の御装束に、

明 寄る浪にたち重ねたる旅ごろも潮解けしとや人の厭はむ

とあるを御覽じつけて、騒がしけれど、

源かたみにぞ換ふべかりける逢ふ事の日數隔てむ中の衣を

とて、源志あるを」ととて奉り換ふ。御身に馴れたるどもを遣はず。實に今一重偲ばれ給ふべき事を添ふる形見なめり。えならぬ御衣に匂ひの移りたるを、如何人の心にも染めざらむ。入道「今はと世を離れ侍りにし身なれども、今日の御送りに仕う奉らぬ事」など申して、かひをつくるもいとほしながら、若き人は笑ひぬべし。

入「世をうみにこゝら潮染む身となりて猶この岸をえこそ離れぬ

心の闇はいとぞ惑ひぬべく侍れば、境までだに」と聞えて、入「すき／＼しきやうなれど、思し出でさせ給ふ折侍らば」など、御氣色賜はる。いみじう物を哀れと思して、所々打赤み給へる御まみの邊など、言はむ方

(一) 裁ちに掛く (二) 厚意だから (三) 明石 (四) 今にも泣き出し (五) 倦みと海とに掛 (六) 煩悩 (七) 人の親の心は闇 (八) かな(後撰、雜一、兼輔) (九) 思ふ道に惑ひぬる

なく見え給ふ。思ひ捨て難き筋もあめれば、今いと疾く見直し給ひてむ。唯この住處こそ見捨て難けれ。如何すべき」とて、

源 都出でし春の歎きに劣らめや年経る浦を別れぬる秋

とて押拭ひ給へるに、いと物覺えず潮垂れ増る。起居もあさましう踉蹌ふ。正身の心地は譬ふべき方なく、斯うしも人に見えじと思ひ鎮むれど、身の憂きを本にて、わりなき事なれど、打棄て給へる恨みの遣る方なきに、面影添ひて忘れ難きに、猛き事とは、たゞ涙に沈めり。母君も慰め侘びて、何に斯く心盡くしなる事を思ひ初めけむ。すべて僻々しき人に従ひける心の怠りぞ」と言ふ。人あな喧や。思ひ捨つまじき事も物し給ふめれば、さりとも思す所あらむ。思ひ慰めて、御湯などをだに參れ。あなゆゝしや」とて片隅に寄り居たり。乳母・母君など、僻める心を言ひ合はせつゝ、「いつしか如何で思ふさまにて見奉らむと、年月を頼み過し、今や思ひ叶ふところ頼み聞えつれ。心苦しき事をも、物の初めに見るかな」と歎くを見るにも、いとほしければ、いと惚けられて、晝は日一日寐をのみ寢暮し、夜はすくよかに起き居て、數珠の行方も知らずなりにけりとて、手を押摺りて仰ぎ居たり。弟子共にあはめられて、月夜に出でて行道するものは、遣水に倒れ入りにけり。よしある岩の片側に、腰も突き損ひて、病み臥したる程になむ、少し物紛れける。君は、難波の方に渡りて、御祓し給ひて、住吉にも、平かにて、色々の願果し申すべき由、御使して申させ

- (一) 懷妊の事
- (二) 私の眞心を
- (三) 精々のところ
- (四) 御薬でも戴いた
- (五) 立派な婿君を明
- (六) 佛を
- (七) 歩きながら勤行
- (八) 石上に取つて
- (九) 馬鹿にされて
- (十) すれば

給ふ。俄に所狭うて、自らはこの度はえ詣で給はず、異なる御道途などなくて、急ぎ入り給ひぬ。二條院におはしまし著きて、都の人も御供の人も、夢の心地して行ひ會ひ、喜び泣きもゆゝしきまで立ち騒ぎたり。女君も甲斐なきものに思ひ捨てつる命、嬉しう思さるらむかし。いと美しげに成長調ほりて、御物思ひの程に、所狭かりし御髪の少しへがれたるしも、いみじうめでたきを、今は斯くて見るべきぞかしと、御心落ちゐるにつけては、又かの飽かず別れし人の思へりしさま、心苦しう思し遣らる。なほ世と共に、斯かる方に御心の暇ぞ無きや。その人の事どもなど聞え出で給へり。思し出でたる御氣色淺からず見ゆるを、徒ならずや見奉り給ふらむ、態とならず、「身をば思はず」など仄めかし給ふぞ、をかしうらうたく思ひ聞え給ふ。かつ見るにだに飽かぬ御様を、如何で隔てつる年月ぞと、淺ましきまで思ほすに、取り返し世の中もいと恨めしうなむ。程もなく、本の御位改まりて、員より外の權大納言に成り給ふ。次々の人も、さるべき限りは本の官復し賜はり、世に許さるゝ程、枯れたりし木の春に逢へる心地して、いとめでたげなり。

召ありて、内裏に參り給ふ。御前に侍ひ給ふに、老成増りて、如何でさる物むつかしき住居に年経給ひつらむと、見奉る女房などの、院の御時より侍ひて、老い痴へるどもは、悲しくて、今更に泣き騒ぎ愛で聞ゆ。上も恥かしうさへ思されて、御装ひなど、殊に引整ひて出でおはします。御心地例ならず、日頃經させ給ひければ、いたう衰へさせ給へるを、昨日今日ぞ少し宜しう思されける。御物語しめやかに有りて、夜に入

- (一) 急に元の立派な
- (二) 減つた
- (三) 定員外の大納言即ち權大納言
- (四) 身分になつたので
- (五) 明石上
- (六) 兄弟(朱雀院)
- (七) 忘らるゝ身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな(拾遺、戀四、右近)

りぬ。十五夜の月面白う静かなるに、昔の事搔崩し思し出でられて、潮垂れさせ給ふ。物心細く思さるゝなるべし。朱雀「遊びなどもせず、昔聞きし物の音なども聞かで、久しうなりにけるかな」と宣はするに、

源わたつ海に沈みうらぶれ蛭の子の足立たざりし年は経にけり

と聞え給へば、いと哀れに心恥かしう思されて、

未宮柱めぐり會ひける時しあれば別れし春の怨み残すな

いと艶かしき御有様なり。

院の御爲に、御八講行はるべき事、先づ急がせ給ふ。春宮を見奉り給ふに、こよなくおよすけさせ給ひて、珍らしう思し悦び給へるを、限りなく哀れと見奉り給ふ。御才もこよなく勝らせ給ひて、世を保たせ給はむに憚りあるまじく、賢う見えさせ給ふ。

眞やかか明石には、返る波につけて御文遣はず。引隠して細やかに書き給ふめり。

源波のよるゝ如何に、

歎きつゝ明石の浦に朝霧の立つやと人を思ひ遣るかな

かの帥の女の五節、あいなく人知れぬ物思ひ覺めぬる心地して、まくなぎ作らせて、差置かせけり。

(一) 諸册二神の生み
給うた子(書紀神代卷)
かぞいろはあはれ
と見ずや蛭の子は

三年に成りぬ足立
たずして(日本紀
竟宴歌、大江朝綱)

ふらむ(朗詠集下、
詠史、朝綱)
(三) 諸册二神が柱を
廻つて遇はれた神
話(古事記、書紀)

(三) 法華八講
(四) 紫上には
(五) 夜に掛く
(六) 太宰大貳の娘。
須磨卷、二四一頁参照

(七) 源が歸京したので
(八) 使者の者に目くば
せさせただけで誰
からとも言はせやに

五節 須磨の浦に心を寄せし船人のやがて朽たせる袖を見せばや
手などこよなく勝りにけりと、見おほせ給ひて遣はず。

深かへりては託言やせまし寄せたりし名残に袖のひがたかりしを

飽かずをかしと思しし名残なれば、驚かされ給ひていとと思し出づれど、この頃はさやうの御振舞更に慎み給ふめり。花散里などにも、唯御消息ばかりにて、覺束なく、なかゝ恨めしげなりとなむ。

(一) 源が五節と見抜いて

(二)(三)(四) 波の縁語

徒らに立ち返りにし白波の名残に袖の干る時もなし(後撰、戀四、朝忠)

源氏物語

自桐壺卷
至明石卷 終

昭和十六年十二月五日印刷
昭和十六年十二月十日發行



要註源氏物語

編者 島津久基

發行所 矢島一二

印刷者 吉原良三

印刷所 康文社印刷所

發行所

東京市神田區
神保町一丁目

中興館

〔電話神田一三三五番
振替東京四二二三番〕

配給元

東京市神田區
淡路町二丁目

日本出版配給株式會社

(會員番號 一一七〇〇九)

定價金一圓五十錢

423
223

◆ 著名大生の先基久津島 ◆

對源氏物語講話

「原文と對照した眞實の現代譯」と推賞され、又「釋評」の部は、源氏學者としての著者の蘊蓄を傾けた有益な研究が隨所に見出され、「紫式部の心魂を解剖批判して、古代精神を現代生活に觸れしめつゝ説き來るあたりは、流石に手に入つたものだ」と、識者の間に好評を博して居る。

加ふるに、簡約な語義、詳密な餘釋、便益な參考、平明な序説、精細な圖版等により源氏を初めて學ぶ者のために懇切なる指導者を以て任じて居る。

卷一には桐壺・帚木、卷二に帚木・空蟬、卷三に夕顔、卷四に若紫、卷五に末摘花・紅葉賀・花宴を收めたが、他の作品・作家との對比、時代・社會との交渉、文學史・文化史の諸方面からの考察を加へてあるので、物語の全體がよく解る。(卷六以下續刊)

卷一(桐壺) 價四・五〇
卷二(帚木) 價一・九〇
卷三(夕顔) 價二・九〇
卷四(若紫) 價二・五〇

近古小説新纂 初輯

從來何れの活字本にも收められて居ない稀觀小説十五種を蒐め、振漢字を施し、頭註に考異と特殊語の釋義と、參照事項等を掲げ、終りに著者が多年研鑽に成れる考説(二九〇頁)を掲げ、各篇の梗概を記し、性質・素材・構想・表現・題號・年代・文體・用語・原本並に所在・系統・影響等に亘り、明快な筆致で精叙されて居る。

朝顔の露の宮 おもかげ物語 小式部 九けつのかひ(舞)
ふせやの物語 さよひめ 天狗の内裏 いづみが城(舞)
かくれざと はもち中將 判官みやこばなし 笛の巻(舞)
ほうらい物語 まんじゆのまへ 日本記(舞)

上製美本 全一冊
總紙數 七百餘頁
定價 金七十六圓
郵税金 二十二錢

發行所 東京市神田區神保町 中興館

うらやまの心持をいふも
さうりつをいふも
まはるもいふも
うらやまの心持をいふも
さうりつをいふも
まはるもいふも
うらやまの心持をいふも
さうりつをいふも
まはるもいふも

終

